長野市の埋蔵文化財第４集

塩　崎　遺　跡　群

―塩崎小学校地点遺跡の第１次調査報告―

1978.3

長野市教育委員会
長野市遺跡調査会

序

当市は，昭和41年10月16日，２市３町３ヵ村が合併して，現在の地域の新長野市となったのでありますが，以来ここに所在する多数の小学校・中学校の建物については，都市化現象を除き，老朽校舎の改築等を重点として進めてまいりました。

塩崎小学校の改築は，所定の計画のもとに昭和52年度から実施することになりましたが，現在地は埋蔵文化財の豊かな包蔵地でありますことが，早くから想定されていましたので，教育委員会の各担当間において，熟談，協議の結果この該当地を記録保存することになりました。

そこで，発掘調査には，教育委員会の委託を受けた長野市遺跡調査会があたることとなり，この結果，本書遺跡発掘調査報告書の刊行をみることにいたったものであります。

文化財の健全な保存は，現状のままで永久に後世へ伝えることが本旨でありますが，今回の発掘調査にあたっては，関係者がよく理解し協力して，よい成果を収めることができましたことを喜びとします。

新しい校舎は恵まれた環境にあり，ここでは関係者がこぞって建物の管理に留意し，教育目標の達成に動かされますと共に，文化財保護の高揚と善良な保存にあわせてその活用に努められますことを願ってやみません。

本書が，記録保存の役目を荷なって，長く埋蔵文化財の保護の基に，一つの活用となることができますなら，このうえない幸いであります。

この報告書が発行されますにあたり，酷暑炎天の中をものともせず，発掘調査目的に添って，惜しみない努力と精進をいただいた，長野市遺跡調査会の皆さん，ならびに，非常なご熱意を示してご援助くださった多くの方々に，厚くお礼を申し上げます。

昭和53年３月25日

長野市長　柳原正之

序

埋蔵文化財の保存処置を，法的に強く求められてきましたのは，比較的新しい時期からであります。

当市の広い地域内には，埋蔵文化財の所在地として，確認されていますものが約1400カ所近くあります。

塩崎遺跡群の存在については，早くから注目されていた地域でありましたが，同地域に建てられている塩崎小学校の建物は，老朽化が甚だしいので，敷地を変えて改築することになりました。

当教育委員会では，長野市から委託を受けて，この遺跡の緊急発掘調査をすることになりましたので，関係担当課と慎重に協議した結果，昭和52年７月３日から同17日までの間に，これを実施したのであります。発掘調査には当委員会の委託を受けた長野市遺跡調査会があたりました。

きびしい炎天下にもかかわらず，遺跡調査会の各調査員の皆さんがその責務を重んじられ，予定の期間内に滞りなく発掘調を遂行されて，多大な成果をあげられましたことは，ご同慶に堪えません。

発掘出土品の中には，報告にもありますように，須恵器坏形土器の「専司」を刻字した土器などがありますが，確かに当時の文化程度を伺うことのできる有力な手がかりの一つであります。

ここに遺跡調査会担当者のご努力により，この報告書を刊行できましたことは，大きな安どであります。

この報告書によって，埋蔵文化財の価値を深めていただき，遠い過去の人々の生活に思いをはせながら，変動のはげしい現代社会において，よりよく生きるはぐくみともなれば望外と思います。

最後に，長野市遺跡調査会の皆さん，地域等において限りない支えとご協力をくださった皆さんならびにあたたかい励ましをいただいたご関係の方々に，衷心から感謝を申し上げます。

昭和53年３月25日

長野市遺跡調査会長
長野市教育委員会教育長

中村博二

例　　言

1. 本書は昭和52年度に長野市・長野市教育委員会と長野市遺跡調査会との契約に基づいた発掘調査報告書である。
2. 本書は調査によって検出された遺構・遺物をより多く図示することを重点においた。尚遺物の詳細については図前頁に表にして記した。
3. 遺構図は片山が担当整図した。
4. 遺物の実測は片山，原，鳥羽，百瀬が担当し，原が整図した。
5. 遺構写真は矢口が担当し，遺物は原が担当した。
6. 土器拓本は百瀬が行なった。
7. 遺物実測図中，推定復元可能なものは鎖線で，黒色処理されるものは▒で，赤色塗彩のものは淡朱色でそれぞれ表示した。
8. 遺構，遺物の執筆は各調査員の住居址遺構カードにより調査員協議のもとに，主として矢口が行ない，その責は矢口にある。
9. 遺物や関係図面，諸記録は長野市教育委員会で保管している。
10. 本書の編集は事務局で行ない，森嶋稔調査団長の校閲を受けた。
11. 印刷関係の業務は，事務局が担当した。

本 文 目 次

序　　文　　長野市長　柳原正之
長野市教育委員会教育長
長野市遺跡調査会長　中村博二

例　　言

第1章　発掘調査の経過 …… 1

第1節　発掘調査に至る経過 …… 1
第2節　調査日誌 …… 1
第3節　調査会の編成 …… 3

第2章　遺跡周辺の環境 …… 5

第1節　地理的環境 …… 5
第2節　歴史的環境 …… 5

第3章　遺構と遺物 …… 10

第1節　住居址 …… 10
1　第1号住居址 …… 10
2　第2号住居址 …… 11
3　第3号住居址 …… 11
4　第4号住居址 …… 11
5　第5号住居址 …… 12
6　第6・7号住居址 …… 12
7　第8号住居址 …… 12
8　第9号住居址 …… 12
9　第10号住居址 …… 13
10　第11号住居址 …… 13
11　第12号住居址 …… 14

12　第13号住居址……14
13　第14号住居址……15
14　第15号住居址……15
15　第16号住居址……16
16　第17号住居址……16
17　第18号住居址……17
18　第19号住居址……17
19　第20号住居址……17
20　第21号住居址……18
21　第22号住居址……18
22　第23号住居址……19
23　第24号住居址……19
24　第25号住居址……19
25　第26号住居址……20
26　第27号住居址……20
27　第28号住居址……20
28　第29号住居址……21
29　第30号住居址……21
30　第31号住居址……22
31　第32号住居址……22

第2節　土　　坑……22
1　土　坑1……22
2　土　坑2……22
3　土　坑3……23
4　土　坑4……23
第3節　柱　穴　群……23
第4節　その他の遺物……24
第5節　土　層　序……24

第4章　結　　語……25

挿　図　目　次

第１図　位置図及び周辺の遺跡 ……38
第２図　調査地及び周辺図 ……39
第３図　遺構分布図……40
第４図　第１・２・３・４・５号住居址遺構実測図 ……41
第５図　第８・９・29号住居址遺構実測図……42
第６図　第10・11号住居址遺構実測図……43
第７図　第12・13・15号住居址遺構実測図……44
第８図　第14・16・17・20号住居址・土坑４遺構実測図 ……45
第９図　第19・21・23・25・26号住居址遺構実測図 ……46
第10図　第22・27号住居址遺構実測図……47
第11図　第28・30号住居址，土坑１・２・３，柱穴群遺構実測図 ……48
第12図　第１号住居址出土土器 ……49
第13図　第４・８・９・10号住居址出土土器……50
第14図　第10・11・13号住居址出土土器……51
第15図　第14・15号住居址出土土器 ……52
第16図　第16・17・18・19号住居址出土土器……53
第17図　第19・20号住居址出土土器 ……54
第18図　第22号住居址出土土器 ……55
第19図　第23・24・25・27号住居址出土土器 ……56
第20図　第28・29号住居址出土土器 ……57
第21図　第29号住居址・土坑１・その他出土土器 ……58
第22図　第14・29・30号住居址出土土器拓影 ……59
第23図　遺構及びグリッと出土土製品及び石器 ……60

図　版　目　次

第１図版　遺跡（調査地）遠望・近景
第２図版　遺構分布状態（南より）
第３図版　遺構分布状態（南より）
第４図版　遺構分布状態（北より）
第５図版　遺構分布状態（北より）
第６図版　第１号住居址
第７図版　第４・５号住居址
第８図版　第10・11号住居址
第９図版　第11号住居址カマド・第４号住居址カマド・第12号住居址
第10図版　第15号住居址
第11図版　第16・27・17・(30)号住居址
第12図版　第17・20号住居址カマド，第20号住居址
第13図版　第18・20・21号住居址
第14図版　第22・23・24・31号住居址
第15図版　第22・23・25号住居址
第16図版　第27・28号住居址・同住居址炉
第17図版　土坑３・土層序
第18図版　遺物出土状態
第19図版　調査スナップ
第20図版　第１・10・14号住居址出土土器
第21図版　第15・18・19・20号住居址出土土器
第22図版　第22・24・25・29号住居址出土土器
第23図版　住居址・包含層出土の土製品・石器

第１章　発掘調査の経過

第１節　発掘調査に至る経過

長野市は市立小・中学校の老朽校舎改築事業を進めているところであり，昭和52年度において本遺跡所在地塩崎小学校東校舎東半分（第１期）の事業が計画され，６月議会の議決を経て工事着工の運びとなっていた。長野市教育委員会はこの計画にもとづき周辺の資料採集分布調査を実施し，過去の調査，出土地点及び地形等を鑑み，弥生時代から平安時代にかけての集落址の存在を予想した。この結果により校舎改築担当課（教育委員会学校施設課）と協議を重ねる一方，長野市遺跡調査会委員と相談し，調査団の編成，調査時期及び塩崎小学校ＰＴＡの協力状況等の作業にかかった。調査団長は塩崎地域で調査研究を進めている森嶋稔上山田小学校教諭に委嘱し，調査団を編成した。調査期日はおりしも梅雨時であったが，校舎改築工事期日・ＰＴＡの協力体制等から第１期工事分780m² を昭和52年７月３日から７月17日まで実施することにした。

第２節　調　査　日　誌

７月１日(曇のち雨)　本調査に先きだち，表土及び包含層上部までの土砂撤去を目的として重機による作業を開始する。午後雨になり，作業を中止。

７月２日(曇)　前日に引き続き重機による作業を行う。表土下約 120cm までの 土砂を 撤去する。

７月４日(曇)　前日と同作業を行うも，一部に遺物の散布が認められるようになり，また重機キャタピラー輪立中に焼土が確認できるようになり，遺構上面に達したと判断し，調査ができるよう整地に重点をおいた。

７月５日(晴)　重機は西方から整地したため，東側に多くの撤去残土を残し，その処理をする。本日より本格的調査に入る。重機残土処理を西側から行うも，廃土処理に苦慮し，調査地縁に運ぶ。この間，調査用グリットの設定を行う。調査地に沿って南北をアラビア数字の10を基点とし，東西をアルファベットで表し，Ａ地区をＡ－Ｙまで設定し，順次これをＢ地区のそれと繰り返すことにした。グリット設定地より調査を進行する一方，遺構確認につとめた。遺構は推定で14ヶ所を数え，住居址と推定される。遺物は平安時代のものを主流とするが，弥生時代のものも含まれ，時期的複雑さを予想される。

７月６日(曇)　重機による残土処理も大詰，今日は２種のブルトーザー，バックホーにより整地を行う。調査は昨日と同様作業を行う。予想遺構(住居址)は更に７ヶ所を確認する。南端に至って弥生時代遺物が多くなる。遺構調査もあわせて行う。一番明確な遺構第11号住居址より調査にかかる。遺物は少ない。

７月７日(晴)　重機による残土処理。第11号住居址の精査及び写真撮影，実測作業を行う。第１号・４号住居址の掘り下げにかかる。第11号住居址のカマド中より２個体の甕形土器が同西側ピットから同器種の完形に近いものが出土した。この他第11号住居址覆土から刻字土器がまた残土整理中，磨製石斧・同石鏃を得た。柳原正之市長等来訪。

７月８日(晴)　第１号住居址の柱穴・カマド周辺の精査・第１・４号住居址の写真撮影・実測作業を行う。この他昨日に引き続き東側地区の遺構の確認に全力を上げる。

７月９日(曇)　東側地区の遺構の確認を急ぐとともに，第２・12・15・17号住居址の掘り下げをあわせて進行する。更級埴科地方誌編纂委員７名の見学あり。

７月10日　東側地区の遺構の確認を今日も引き続き行う。第15号住居址ピット・カマド周辺の精査，第８号住居址の土器溜りの検出作業を行う。第12・15号住居址の写真撮影・実測作業を行う。本日より新たに第３・16・20号住居址の調査にかかる。

７月11日(雨)　前日に引き続き遺構検出作業を進めるも，調査開始前に一時上がった雨がまた降り出し，その量を増すようであり，また遺構も床面近くと微妙な検出ヶ所であったので，10時15分本日の作業を中止する。新たに第10号住居址の調査にかかる。第10号住居址より須恵器高坏形土器・坏形土器が出土した。

７月12日(晴)　新たに第２・23号住居址の調査にかかる。第12・16・17・21号住居址の写真撮影，第12・20号住居址の実測作業を行う。

特記遺物として第９号住居址覆土からとり上げた土器内に，前日の雨に洗われ「専司」の刻みがある須恵器を発見した。この地点は住居址の密集地であり，採集後であれば，出土地点は定かになれなかったが，出土遺物はそのまま出土地点ごとにまとめておいたため，偶然的に発見したものである。

７月13日(曇)　第９・14・19号住居址の調査を開始する。第２・５号住居址の写真撮影，第２・５・16・17号住居址の実測等の作業を行う。

７月14日(曇・雨)　昨日に引き続き第13号及び新たに第９・19・24・26・30号住居址の調査を進行する。第９・13・22・23号住居址の写真撮影・実測を，第17・21号までの検出遺構の総体的写真撮影を行う。第９号住居址の床面に焼土を検出する。この他東壁の１部を確認したのみの第６・７号住居址の確認を行うも，遺物は甕形土器片のみ各数点を得たのみである。郷土を知る会３名来訪。

７月15日(時々断続的降雨あり)　第10・14・18・28号住居址の検出と，第26・27号住居址の確認と掘り下げを行う。第３・10・14・18・19・21・22・24・29号住居址の調査と精査を進めるとともに検出確認後写真・実測作業を行う。

7月16日(曇)　前日までにすべて確認した遺構を検出するも，新たに第31・32号住居址が確認され。調査を進める一方，既検出遺構の精査・写真撮影等を行う。第22号住居址の床面を追求したところ，各壁下に石列を検出し，ほぼ直線になるようである。また第28号住居址内に長方形の土壙があり，それの検出をいそぐ。

7月16日(雨曇)　前日確認・検出した遺構の写真撮影，実測作業を行う一方，平板による全体遺構分布測量を行う。また基準点の標高を求める作業も合わせて行う。これにて主なる調査を終了した。

7月17日　器材撤去，一部カマド等の諸施設の精査を行う一方，残存遺構の検出・写真撮影・実測作業を行う。

7月20日　重機による検出遺構面の整地。

10〜12月　遺物整理（洗浄・註記・復元）作業

2月〜3月　復元作業の他残り一部の洗浄註記作業，実測図整理・整図，遺物実測・整図・写真・拓本等を行い，執筆作業を行う。

第3節　調査会の編成

本調査会は埋蔵文化財の保護・保存及び，調査企画を主なる業務とし，調査結果を有効に生かすため設立されたもので，調査会構成は以下の通りである。

1　調　査　会

会長　中村　博二　長野市教育委員会教育長
委員　米山　一政　長野市文化財保護審議会会長
〃　桐原　健　〃　委員
〃　森嶋　稔　調査団長
〃　横山　勝　長野市教育委員会　教育次長
〃　関川千代丸　嘱託
〃　矢口　忠良　〃　社会教育課主事
監事　松坂　輝朝　〃　庶務課長

2　調　査　団

調査団長　森嶋　稔（日本考古学協会員・上山田小学校教諭）
〃 主任　矢口忠良（　〃　長野市教育委員会主事）
調 査 員　片山　徹（県考古学会員・信大学生）
〃　鳥羽英継（　〃　〃　）
原　明芳（　〃　〃　）
百瀬久雄（　〃　〃　）

（補助団体）　塩崎小学校・同ＰＴＡ・事業主体者（学校施設課）・ 同請者(柳 原 工務店・笠原建設共同体)・長野西高地歴班

作業員　北村浪三・二瓶留冬・小幡つゆの・村田邦夫・水野茂利・荒井なか子・宮崎敬一塩入二郎・丸山穂積・宮崎武雄・中村康彦・安藤妙子・宮崎秀夫・荒井君江・宮崎美智子・和田正子・倉石幸子・北村きよ子・柳沢伊都海・北沢元雄・矢島和光・大道栄一・松林英雄・宮本基江・島田ミヨ子・島田かつし・北村俊享・岡主税・伊藤みつ江・小島久子・吉沢米子・小山静子・倉石金治郎・住沢静子・百瀬京子・山田貞子・横井せい子・宮崎音和・樋口寿朝喜・久保田大・大島勇喜三・樋口けさ子・北村孝雄・宮崎千広・宮崎信子・宮崎雅子・山口哲男・和田哲・宮崎日出子・宮崎嘉子・高沢豊宏・権田隆美・山田忠弘・三宅誠司・小出正江・臼井幸人・三沢道子・小宮山孝一・青山康男・伊藤当子・斉藤幸助・風間みさを・宮崎静波・片桐恵美子・鈴木松子・関明信・鎌田重子・小幡智子・上原光子・後藤優子・上原光子・丸山久子・渡利悦子・駒村満・北村幸子・北村かね子・山田ケサミ・坂口礼子・荒井和枝・宮崎公子・風間きぬい・小山美作子・北村みち江・小島志江子・西沢かつ子・北村信子・駒村より子・荏戸けさみ・称津悦子・北村文子・山本孝子・丸山道子・山本貞子・古川昭子・滝沢清志・風間豊子・鈴木君子・宮崎和美・伊藤たき子・宮崎重信・石川清美・平松森子・小幡鴨夫・樋口太一

（長野西高地歴班）　万羽美奈・中村悌子・湯田千亜紀・西内浩美・坂口恵子・中村千寿子・中沢恭子（顧問　東福寺利雄）

図面整理等作業者　矢口栄子・赤羽史子・阿部美和子

この他同地区区長の方々，同小学校改築期成同盟会及び本調査に協力いただいた前記した方々に末節末文ながら，記して感謝の意を表します。

事 務 局　事務局長（社会教育課長）丸山喜正

担当局員（　〃　補佐）松橋　順

〃　（　〃　文化財係長）内田早苗

〃　（　〃　主事）　矢口忠良

〃　（　〃　嘱託）　関川千代丸

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地 理 的 環 境

東西の山地間を千曲川の縦貫により形成された地形で，本遺跡上流の現戸倉上山田地籍付近から顕著なる土砂推積による沖積地を認められる。これより上流は河岸段丘及び扇状地形になり，それに前記河川のかかわりの中で構成しているのに対し，本調査周辺は堆積による地層上昇も考えられるが，千曲川に流入する河川による扇状地の高低差はそれ程感じさせない。また長野市において山地間山麓の東西巾は約 20km と広く，長野市がのる沖積地は犀川の影響が大きく作用しており，本調査地に近接する篠ノ井市街地から以北ではこの傾向が顕著にみられるようになるが，本遺跡においては聖川の影響が強くみられ，犀川に比べその流量，土砂運搬量は比べものにならないことは地形を見るまでもないが，この河川がもたらした土砂により千曲川を東へ追いやったことは事実である。このことは，この付近から北流してきた千曲川は，流路を徐々に東に向け，横田付近で更に東に変え，松代市街地西端にまで至ることで理由付けできるところである。しかし流路変更をさせた聖川の主要堆積は信更地区の水田面たる帯状の一次的堆積により，その力を激減する。現在この河川は現水田面より約３mの天井川になっており，古くからこの河川の制御が行なわれていたことを物語る。さて本遺跡に影響を与えた左岸の状況をみるに，越，見林，石川にみる扇状地状河岸段丘の緩傾斜高地があり，その前面は千曲川旧河川による巾の広い水田面たる凹地になる。現集落及び果樹園は千曲川が形成した所謂自然堤防になり，現河川までは旧流路（支流）の繰り返しで小起伏がある。即ち地形断面は山麓（扇状地）の緩傾斜，平坦部的構造（河岸段丘），凹地（後背湿地）になり，また微高地の自然堤防及び河川敷，千曲川となる。地目は既して山麓付近の地形上は集落，畑地，果樹園になり，自然堤防上は同種のものが，また凹地は水田となり，自然堤防と現河川間は堆積砂質土を利用した畑地になる。この傾向は古代を通じ現在までの地形利用を一貫している。ちなみにこの周辺の字は河川敷で河原を用いたものが多く，自然堤防上では屋敷，(中)条，(松)節，一本木，(伊勢)宮，山崎等があり，集落に基づいたもの，耕地割によるもの，地形によるものが主であり，また後背湿地たる凹地には原河，岸田，畑，柳を付した字名が多くなる 。

第２節　歴 史 的 環 境

この調査地付近は所謂考古学上の歴史から中世，近世を通じ，事実事象が多い重要地域であ

るが，本節では考古学的研究対象を主題として述べていくため前記部分は割愛する。

本遺跡は千曲川左岸の自然堤防上にあるもので，塩崎遺跡群遺跡として把握され，内に松節，伊勢宮，中条，一本木，小学校付近，町屋敷地点を含む。この北に同じ自然堤防上に位置する篠ノ井遺跡群，南に稲荷山遺跡群がある。これらは一連の遺跡と考えられ一応の区切りとして小河川をもって群を把握したにすぎない。[註1] この他凹地水田面には後出の条里状遺跡等の農耕地があり，山麓，扇状地，河岸段丘上には山腹頂部の越将軍塚をはじめ城山地区古墳群，四の宮地区古墳群，薬師山古墳群，見林古墳群，丸山古墳群があり，これらの内に八幡宮古墳，鶴萩古墳，中郷神社前方後円墳，池の上古墳，丸山第4号墳等の著名なまた市指定史跡となるような古墳がある。これに対し集落址として古墳の他低位において，それも水田面とさして比高差のない位置から縄文中期の遺跡が存することは特異であり，また現堤防より千曲川の河川敷内に同時代後期の堀の内遺跡があり，今後の調査に期待される。これは本地において異質なもので，山腹，山麓は古墳時代と平安時代に限りその遺物を採集することができる。それより下段の水田面（生産面）に接する地域からは前記したものを除き，弥生時代後期の箱清水式土器を確認するのみで，弥生時代中期以前のものは確かめることはなかったし，古墳時代遺物として確定できるものもなかった。この点本調査地を含む遺構の性格があるように思える。これらはそれぞれの位置，立地の中で，各該期にあたるものが連携して存続していたものと考えられる。主体が本調査地がのる自然堤防上にあり，それにより派生した様々な事象をこれらの中から理解され得る要素を多分に含んでいる。それは弥生時代における銅鉾及び同形石製模造品の問題，同時代における単発的遺跡及び古墳のあり方とそれを形成した主なる集落地の存在及び平安時代における拡張的拡散の状況等，内含する問題を解明する上で主要な要素を含んでいるということであり，善光寺平における重要な遺跡の一つである。[註2]

このような中で本調査の主なるものをみると，小学校付近と称される本調査地はプール造成の際，多量の弥生時代後期の遺物が出土しており，また体育館（講堂）建築時にもそれらが確認されている。[註3] 町屋敷遺跡では灰釉陶器の薬壷形の大形壺が完形のまま出土し注目され，やや南の伊勢宮地点遺跡では縄文晩期から弥生時代の主なる遺跡をもとに弥生時代研究の進展をもたらし，またそれを基礎とした研究が進んでいる。[註4] 荒井藤四郎氏はこの遺跡群をはじめ，周辺地の遺物採集を進め，この地の先駆的考古学研究をもたらした。この他松節地点遺跡では小島貞雄氏により，銅鉾及び同形石製模造品が検出され，[註5] 内容において銅鐸文化圏を超えたところからの出土であり，重要な問題を提起している。以上のとおり考古学上のその生活史・文化地方史の全般を覆う問題提起と，解明されうる要素を多分に含んでいると考えられ，今後の調査及び，研究に期待がもたれる。[註6]

註 1．古墳及び古墳群の内容は次のとおりである。

1. 古　　墳

所　在　地	地形	古　墳　名　称	摘　　要　（特　徴）	備　　考（調査時）	指定等・
越 将 軍 塚	山頂	将　軍　塚	前方後円　石室割石積後円34m・同高7.4m	前方後方墳の説あり	市指定史跡
同　東谷	山腹	東 谷 古 墳	円墳　径　7.0　高2.4		
同　城山	台地	城 山 古 墳	円墳　径　13.6　高 2.9　横穴石室		
長谷　八幡宮	山麓	八 幡 宮 古 墳	円　径 17　高 5.2	変形四獣鏡・剣・管玉・小玉	
同　平	山腹	平　古　墳	円　径 15.5　高 2.7　横穴石室	奥行 6m　石室高 1.7m	
鶴　萩	山麓	鶴 萩 古 墳	円　径 15.5　高 2.9　横穴石室	〃　9.65m高 2.82m	市指定史跡
四宮中郷社内	台地	中 郷 古 墳	前方後円　長 51　後 円径 26　高 6	培塚７基現在２基残存	市指定史跡
同　境内	台地	同　陪 塚	円　２基　径 7.0　高 2.0　前後	石室埋納等不明　勾玉・クツワ	
四宮　秋葉山	山腹	秋 葉 山 古 墳	円　径 7.0　高 1.9　半壊	横穴石室　天井石１枚残存	
同　小日向	山腹	小 日 向 古 墳	円	〃　石室の一部のみ	
同　小日向	山腹	大 伯 母 古 墳	円　経 11.0　高 2.5	〃　（？）	
同　将軍山	山頂	将 軍 山 古 墳	円　径 32m　高 3.7	主体部不明	
同　薬師山	山頂	薬師山第１号墳	円　径 26.0　高 5.6	未発掘（？）	旗塚の伝承あり
同　上　同	山腹	同　第２号墳	円　径 2.4　高 0.6		旗塚の伝承あり
同　上　同	山頂	同　第３号墳	円　径 4.5　高 0.7		旗塚の伝承あり
同　上　同	山頂	同　第４号墳	円　径 4.5　高 0.7		旗塚の伝承あり
同　上　同	山頂	同　第５号墳	円　径 5.0　高 0.9	径 2～5m で小規模の古墳	旗塚の伝承あり
同　上　同	山頂	同　第６号墳	円　径 5.0　高 0.6	径 2～5m で小規模の古墳	旗塚の伝承あり
同　上　同	山頂	同　第７号墳	同　径 4.5　高 0.75	径 2～5m で小規模の古墳	旗塚の伝承あり
池　ノ　上	山腹	池 ノ 上 古 墳	円　径 15　高 5.1　横穴石室		市指定史跡

2．形跡及び伝承等により確認している古墳

所在地	地形	標　徴	備　　考（伝　承）
(湯ノ崎)東　谷	山腹	ナ　シ	明治中期畑開墾の際金環・刀等出土，現在平地
東　谷	〃	ナ　シ	宮崎貞一氏宅とトンネル中間・明治時代崩壊
東　谷	平地	石室の石	風間梅干之助氏裏畑・玄室の奥壁石一枚立つ
城　山	山頂	ナ　シ	赤沢城跡本丸附近) 明治時代崩壊
〃	山腹	ナ　シ	城跡の南西畑) 明治時代崩壊
〃	〃	ナ　シ	太子堂南・鉄道布設のため切崩す
青屋敷	〃	ナ　シ	長谷神社南五十米・明治中期まで丘上に老松あり，開墾の際，土器・刀・勾玉等出土
小日向	〃	小　祠	鳥坂道の南下側・桑畑中の空地
〃	〃	〃	前号の西北三十米の山林中
〃	〃	ナ　シ	伊藤捨三氏所有畑
〃	〃	ナ　シ	大伯母古墳西方五十米の畑地
葉師山	〃	小　祠	鳥坂道小日向屈曲より北東五十米の山林中
見　林	〃	小石堆積	宮本貞雄氏宅北西隅
〃	〃	小　祠	島田実氏宅裏
〃	〃	ナ　シ	立山氏宅西の畑・島田翁算塚の碑石はここから搬出という
〃	〃	杏樹と石	前号の西約三十米
〃	〃	ナ　シ	前号の南・開墾敷地してその跡不明 ◎以上見材五墳の他に三墳があったと云われ，この地名を「ヤツカ」と呼ぶ

上記表は『塩崎村誌』によるものであるが，1は『信濃考古学総覧』を清水昭治氏が是正し，備考以下は筆者が付け加えたが，同誌中清水氏他の調査により確認されたものを根拠としている。

註2　集落址

1　塩崎遺跡群

伊勢宮遺跡　縄文時代晩期土器・凹石・打製石斧

弥生時代　前期・中期・後期土器・石包丁・磨製石鏃・太型蛤刃石斧・硬玉原石・碧玉原石

松節遺跡　縄文前期土器・弥生時代後期土器・銅鉾・石製模造鉾

この他各地点遺跡より前記時期他古墳時代・歴史時代の土師器・須恵器・灰釉陶器等が全域に分布し，大集落が予想される。尚本遺跡発見及び遺物の確認は荒井藤四郎氏に負うところが大きい。また銅鉾・石製模造鉾は長野市指定文化財となってい，発見者の小島貞雄氏が保管している。

2上見林遺跡　山腹の段丘上平担部にあり，縄文時代石鏃・打石斧及び平安時代土器片が出土しているが，量は少ない。

3下見林遺跡　中郷神社の北側の山麓にあり，平安時代土器片が若干出土している。

4 栟下遺跡　山麓端台地にあり，弥生後期及び平安時代土器片が多量に認められる。

5 鶴前遺跡　山麓斜面上にあり，弥生時代，平安時代の遺物が出土しているが，散布量は少ない。

6 戸部間遺跡　水田面よりやや高い平地にあり，縄文中期土器片・磨石斧・石鏃及び平安時代土器片が出土している。

7 会下遺跡　城山山麓の緩傾斜で，平安時代を中心とする遺物が採集されている。

8 立町遺跡　低い台地上にあり，平安時代遺物が出土しているが，量は少ない。

註 3　昭和35年のプール，同40年の体育館建設によるもので，これらの遺物は旧塩崎中学校に保存されていたが，周辺中学校との学校統廃合により，幻の遺物となっている。弥生時代後期の壺・甕形土器等の完形あるいはそれに近い形で発見されたものが多数あったと伝えられている。

註 4　磯崎正彦「伊勢宮遺跡の古代弥生式土器」『信濃』昭和34年

註 5　昭和 8 年の深耕による偶然的発見で，その後昭和26年に米山一政氏の発掘調査が実施された。

註 6　本節の基本資料として『塩崎村史』（塩崎村史刊行会，昭和46年）を使用した。

第3章　遺構と遺物

本調査において確認・検出した遺構の種別は，住居址・土壙及び柱穴群の3種である。住居址は調査地全面に認められ，複雑に重なり合い，密集する傾向にある。単独で検出されたものは第15号住居址の1軒である。また今回の調査で検出したものは30軒で他に確認したもの2軒であり，総数32軒に及ぶ（第3図・第2～5図版）掘り込み確認土層面は黄褐色砂混り粘質土層で，覆土は黒褐色粘質土を基本としている。

第1節　住居址

1. 第1号住居址（第4・12図第6・20図版）

遺構　プランはカマド所在地と対壁の中央を結んだ線を主軸とすると，主軸方向がN－30°－Eを指し，主軸長（5.55）×東西軸5.85mの不整隅丸方形である。尚本遺構の北壁は調査地の外にあるため未確認である。壁は直に近く南壁15cm・東壁31cm・西壁15cmを測り，今回の調査では比較的深い掘り込みである。主柱穴は4本の方形配列で，P_1は径58cm，深さ22cmで他のP_2・P_4は径30cm代，深さ20cm代をそれぞれ計測する。P_7・P_8は第3号住居址の主柱穴である。床面は平担で軟弱である。覆土に頭大から拳大の円・角礫が多く認められる他，遺構確認上面において炭化物が多く認められ，その堆積は薄いレンズ状を呈していた。これは後世の遺構と考え，追求したが明確なる結論は得られなかった。カマドは北壁中央よりやや東側に構築され，所謂粘土製両袖型のものである。内部は焼土が残存しており，中央に支石と思われる河原石が横転していた。焚口の両側は立石をもって構成し，その間に甕形土器2個体が口縁部を西に向け直線的に重さなりあう状態で発見され，上面は再焼成を受け，色調が変化している。規模は主軸（1.35）×焚口袖石間1.06mを測る大形のものである。この他P_3東に長軸80cm，深さ25cmの卵形の土壙状遺構があり，内より完形に近い甕形土器を得た。

遺物　前述した甕形土器の他，高坏形土器，坏形土器の器種が出土している。坏形土器は椀形的なものが多い（第12図2）。この他1のように丸底気味で口縁部が更に外開し，端部付近で立ち上るものもある。高坏形土器では3のように脚部が筒形で，裾部が外開するものが多く，坏部の中位の稜は明瞭でない。この種の量は多くない。甕形土器には体部が球形になり，そこに最大径を有するもの（4・5）と最大径が口縁端部にあり，体部が所謂鳥帽子形を呈し，長胴なものの二種がある（6～9）。前者はヘラ，指頭によるナデを基調とする整形にたいし，後者は6が外面をタテヘラケズリが施こされ，内部は横位に施こされた後ナデ整形によるが，ケズリ痕跡を残す。他の体部外面は櫛状工具（ヘラ）により上から下への整形により浅

い擦痕を残すが，成形により，その範囲が限定される。また成形においての特色として，図示した3点とも体部下半に擬口縁を有する点注意される。この他蛇文岩製の未製品が出土した。

2. 第2号住居址（第4・23図，第23図版）

遺構 プランは方形を呈するものであろうが，第1号住居址により西壁付近の一部を除き大部分が破壊される。南北軸はN－10°－Eで，この軸長は2.55mである。掘り込みは直に近く，床面レベルは第1号住居址と同じである。床面は平担で軟弱である。他の遺構は不明である。

遺物 坏形土器・甕形土器片が数点出土したのであるが，その破片は第1号住居址のものと類似する。この他覆土中より弥生時代甕形土器片を用いて径2.4cmの円板があり中央に凹を有する（第23図4）ものが出土した。

3. 第3号住居址（第4図）

遺構 プランは隅丸方形を呈するものと思われるが，その規模は第1・2号住居址により西壁の一部を除き全壊され，また北壁は未確認であるが，調査で検出した部分は3.70mで，少なくとも一辺5m以上と推定される。壁は直で，床面レベル・主軸方向とも第1号住居址と同じである。主柱穴は2ヶ確認され，P_7・P_8であるが，配列は方形であると思われる。径は大きく70cm内外で，深さは10cm，16cmと浅い。

遺物 出土量は皆無に近く，特に該期のものは4点の甕形土器片にすぎなかった。

4. 第4号住居址（第4・13図，第7・23図版）

遺構 調査地最西端より検出したもので，第5号住居址を切り，西壁の一部は未確認である。プランは主軸2.90×短軸2.78mの，主軸方向をN－40°－Eとる方形で，掘り込みは直に近く，北壁22cm・南壁33cm・東壁24cm・西壁34cmを計測し深い。床面は平担で軟弱である。柱穴はなかった。カマドは北壁中央付近に設けられ，粘土製両袖型である。規模は主軸40×焚口袖間60cmである。内部より甕形土器体部片・自然石1個を検出した他，床・壁面に焼土を残す。またカマド右手に北壁に向かって傾斜する床面に比して最高7cmの浅い落ち込があり，貯蔵穴として利用されたであろうと思われる。

遺物 出土量は少ない。糸による切離痕を有する坏形土器片・ロクロ整形痕を有する甕形土器片及び須恵器甕形土器（第13図1）・土錘（2）が出土したのみである。

5. 第5号住居址（第4図，第7図版）

遺構 第4号住居址により南・西壁隅が破壊される。プランは南壁がやや開く不整方形で，東西軸2.44×南北軸2.04mの小規模なものである。長軸方向はN－10°－Wを指す。壁は直で，掘り込みは5～11cmの範囲内にあり，浅い。床面は平担で，軟弱である。遺構中央西北よりに東西にやや長い77×70cmを測る土壙状ピットがあり，更に内に28×24cm・深さ12cmのピットを有する。

遺物 覆土中から量は多くないが，弥生～古墳又は平安時代であろう土師器片を得た。その内訳は弥生時代甕形土器片7点と土師器坏形・甕形土器片2点を得たのみである。

6. 第6・7号住居址

遺構 調査址最西端に位置し，たぶん住居址であろうと確認したもので，その内容は不明であるが，壁は直の状態で，床面は軟弱である。掘り込みは各々東壁下で16cmを確認した。

遺物 確認調査での出土遺物はなかった。

7. 第8号住居址(第5・13図，第7図版)

遺構 西端の重複遺構群内にあり，そのうち最も新しい遺構である。プランは方形を基本とするが，東壁の中央付近がつぼまる。主軸3.35×短軸3.2mで，掘り込みは直に近く，北壁が最も深く，24cmを測る。主軸方向はN－40°－Eである。床面は平担で軟弱である。カマドは東壁中央よりやや左手に位置し，長軸50×袖間50cmの小規模な粘土製両袖型で，端部に袖石たる立石がある。内面は焼土で埋まり，土師器甕形土器片，自然石を検出した。

遺物 カマド内の体部ヘラケズリの甕形土器の他，須恵器蓋形土器・坏形土器を主として出土した。蓋形土器は偏平の平担な天井部と口縁部の嘴状端部を有するものである。坏形土器においては，土師器（第13図5）が，糸切離痕を中央に残し，周辺がヘラケズリされるのを特色とする。他は須恵器で，糸切離痕を残し体部はロクロ整形痕が顕著に残る。この他本住居址より古い遺物と思われるものが覆土より，須恵器のヘラによる切離の坏形土器(12)と同盤形土器の脚部（13・14）が出土した。

8. 第9号住居址（第5・13図）

遺構 西端付近に位置し，第8・11・13・10号住居址が上部にある。プランは主軸方向をN－50°－Eにとる。主軸5.90×短軸5.30mの規模の隅丸方形を呈する。壁高は西壁で35cmを測

り，南壁9cm，東壁10cmである。床面は中央がやや盛り上がり，軟弱である。柱穴は方形配列で西壁のP_3・P_4は壁に近く，他は東壁より1.4m付近にある。形態は円を基本とするが，P_1のみ西に延びる楕円形である。深さは30cm前後である。カマドの痕跡として西壁中央付近に薄い焼土が認められたが，形態は不明である。この他西壁付近床面に炭化物と焼土が認められた。

遺物　遺構が重複している関係からか時期を立証する資料が少なかったが，重複址内の遺物を選択した。器種としては，坏形土器（第13図15）・高坏形土器，甑形土器（16～18）・甕形土器(19)である。坏形土器には15のように丸底で口縁部が屈開するものと椀形のものがあり，また高坏形土器の坏部稜線は明瞭でない。甑形土器の底部は一孔で底部中央にあり小さい。19の底部には木葉痕を有する。

9.　第10号住居址（第6・13・14図，第8・20図版）

遺構　調査地西端付近の最南に位置し，北東隅は第11号住居址に破壊される。また南壁の一部は未確認である。プランは不整の隅丸長方形を呈し，その規模は主軸（東西）6.60×短軸4.38mで，主軸方向はN－55°－Wである。壁は直に掘り込まれ，北壁27cm，南壁21cm，東壁30cm・西壁25cmと割合しっかりとした住居址である。主柱穴は方形配列4本と推定されるが，1ヶ所は未検出である。その大きさは径12～20cmで，深さ4～10cmと小さく浅いものである。床面は中央がやや凹み，それに向けて傾斜するが，柱穴間の床面は堅く踏み固められている。カマドの遺構が残存しなく，明確なるものを確認することはできなかったが，東壁及び西壁下に焼土が認められた。遺物は東壁下に須恵器大甕の頸部以上が口縁を床面に接して発見された他，住居址中央西側より同高坏形土器，盤形土器を検出した。

遺物　本住居址からの遺物の出土量はそれ程多くなく，また完形品も少ない。出土遺物中須恵器の坏形土器が目立つし，図示されるもののほとんどがそれである。土師器は甕形土器といってもよい。器種には蓋・坏・盤・高坏・甕各形態があり，蓋・甕形土器に後続の土器形態が認められるが，併出資料として提示する。蓋形土器には擬宝珠形と偏平宝珠天井部から口縁部にかけて弯形と坏形，口縁端部において嘴状と外反との違いを有し，また坏形土器においても，坏形・高台付同形・皿形・同形高台が付加されるものとの差異がある。高坏形土器はすべて須恵器であり，甕形土器片においても須恵器のそれが凌駕する出土量があり，明確に土師器のそれと断定する資料も小破片で，少なく，器形を推定するものはなかった。

10.　第11号住居址(第6・14図，第8図版)

遺構　第8～13号住居址内で最も新しい住居址である。プランは東壁のやや長い隅丸方形を呈し，規模は主軸4.70×短軸4.50mで，主軸方向をN－55°－Eをとる。住居址の掘り込みは

直に近く，北・東壁で26cm・南壁18cm，西壁30cmを計測する。柱穴は不明であるが，カマドは東壁の中央よりやや南に偏った位置にある。基本形態は粘土製両袖型であり，焚口に短かい袖を有し，本体は壁外へ張り出し気味になる。内部に焼土・甕形土器を残す。その他カマド右側に東・南壁隅に長軸65m，床面からの深さ16cmを測る貯蔵穴があり，内より坏形土器の完形品が出土した。またこの覆土中の遺物に低い高台を有する須恵器坏形土器で，底部外面に「専司」と刻んだ土器片を検出したが，後述する柱穴群に関与する遺物と思われる。

遺物　出土量は少ない。坏形土器には土師器・須恵器が出土しているが，土師器の方が多い。図示できるものは貯蔵穴よりのもの（第14図６）と覆土中より検出したもの（７）であり，甕形土器においては，カマド内に残存していたもの（８・９）が図示できる資料であり，覆土中からも認められたが断片的なものにすぎない。最大径が口縁端部にあり，体部下は鳥帽子形になる。この他覆土中より10の盤形土器片を得たのであるが，採集遺物内にあったので参考資料として提示した。

11.　第12号住居址(第７図，第９図版)

遺構　西側遺構群の中央付近にあり，第１・11・13号住居址と重複するが，第11号住居址に次いで新しい。プランの基本形態は方形で，その規模は主軸3.0×短軸2.3mを測り，主軸方向はN－40°－Wである。掘り込みは直に近く，深さは北壁で20cm・南壁14cm・東壁16cmであるが，西壁は第11号住居址床面より2cm高い位置で確認した。床面は平担で軟弱である。柱穴の痕跡はなかった。カマドは西壁中央にあり，破壊されているが，右片袖に角礫支石が残存する。この中より甕形土器体部破片を得た。また覆土下部より自然石２個を確認した。

遺物　量そのものは少なく，器種として，カマド他周辺より土師器甕形土器・坏形土器片を得，この他覆土中より須恵器甕形土器片が出土したのみである。

12.　第13号住居址(第７・14・23図，第23図版)

遺構　西側遺構の中央にあり，第８・12号住居址により破壊を受け，第９・10号住居址の一部を破壊する。プランは不整方形で，2.83×南北軸3.47mの規模であり，主軸方向をN－65°－Eを示す。壁は直に近く，重複のない北・西壁で31cmを測る。床面は平担・軟弱である。柱穴はないが，住居址中央に楕円形（主軸1.08×短軸62cm・深さ13cm）の土壙状遺構があり，その中に円形ピットを有する。カマドは北壁中央付近にあり，左側片袖一部と焼土を残す。

遺物　出土量は少なく，坏形土器・甕形土器片のみである。坏形土器では須恵器が目立つ。この他，砂岩製の７面が使用された断面長方形態のト石がある（第23図７）。

13.　第14号住居址（第８・15・22・23図，第20・23図版）

遺構　西側遺構集中地にあり，調査地南端に位置し，北側約半分を検出した。プランは楕円形に近い形状を呈すると思われる。長軸3.6mで，この方向をN－50°－Wにとる。掘り込みは緩傾斜し，北壁で20cm，東壁で14cm，西壁で32cmを測る。北西部隅は土壙４により破壊を受ける。床面は平担で軟弱であり，検出址よりの柱穴は確認されなかった。覆土は炭化物が多く混入する黒色砂質土である。

遺物　出土量は多く，浅鉢形土器・大小の壺・甕形土器の器種が出土している。浅鉢形土器は口縁部が内弯する椀形を呈し，施文として口縁端部に縄文が施こされる。壺形土器形態には２種ある。その１種は口縁部が外開し，頸部が鼓状になり，その部に帯状の隆起があり，上下に棒状工具による整形的沈線で区画される。帯状隆起上に縄文を施こす。整形ヨコナデを主に丁寧である。口唇部に棒状工具による左方向からの押し引き状圧痕を施す。大形のものは口縁部が立ち上がり直立的又は内弯気味の所謂袋状口縁になる。口縁部は，縄文施文地に山形沈線を主文とするものが多く，口唇部に縄文が施こされるものもある。頸部には幅の広い横位の沈線に区画された中を櫛状工具による平行条線的施文と，鋸歯状文様の篦先による浅く，鋭い沈線によるものがある。また体部は前者区画文同様縦形の手法によるものと，山形平行沈線の隔間を縄文で埋めるものがある。甕形土器の基本的形態は口縁が外反し，端部が面取りされ，そこに棒状工具による圧痕と，縄文を残す。頸部から体部の施文は櫛状工具による簾状文，ハの字状条痕文及び左傾の斜行単線文等がある。又頸部に連続半月形突文があり，その下に櫛描波状文で飾られ，それを区画するように二条の蛇行沈線で施文される。波状文は振幅，波長とも短かく，左廻り施文の特色を有する。石器としては閃線岩製太形蛤刃石斧が１点出土している（第23図１）。

14.　第15号住居址（第７・15・23図，第10・21・23図版）

遺構　西側遺構群の東にあり，単独で検出されたものであるが，北壁の全部と西壁の一部は調査地外であるので確認できなかった。プランは主軸6.20×短軸5.43mの隅丸方形で主軸方向N－45°－Eを指す，割合しっかりした住居址である。掘り込みは直に近く，東壁が最も深く27cmを測る他，南壁で14cm，西壁で6cmである。床面は平担で軟弱である。柱穴は方形配列４本柱になると思われるが，北西部のものは未確認である。径22cm内外のもので，深さは9～22cmと巾がある。カマドは西壁中央付近にあり，形態は両袖形で主軸100×袖間45cmで，袖石が左側に，支石が中央に残存する。共に自然河原石で，床面は焼土化する。この他カマド右側に不整形な貯蔵穴的落ち込みがある。この他床面に自然石の偏平なものが柱穴間付近にあり，また覆土中に河原石・角礫等があった。

遺物　出土量は多いが，そのほとんどが破片である。完形に近い甕形土器・高坏形土器がカマド内から出土した他，そのほとんどが床面カマド周辺からのものである。坏形土器には須恵器（第15図14）と土師器があり，前者は1個体のみで口縁部が内傾しながら，長く立ち上がり，蓋受部を有し，底部は平底に近い。またこの種の蓋形土器の模倣として坏形土器として利用された可能がある土師器が1個体ある(13)。後者は坏部が外開し，頸部でくびれ，体部との差が明瞭になるものが多く，底部が丸底になる(9～12)。ただ8のみ底部から体部が直線的に立ち上がる器形になる。高坏形土器の破片も比較的多く認められたが，器形を図示できるものはカマド内より出土した1点のみである(15)。甕形土器には2形態あり，カマド内出土のもの(18)は所謂鳥帽子形を呈するのにたいし，球形胴になるであろうもの(16)がある。底部(17)は小形で，平底である。この他，底部が偏平で凸レンズ状の土製紡錘車が1点出土している（第23図5）。

15.　第16号住居址(第8・16図，第11図版)

遺構　調査地中央南部遺構群の1つで，第18・27号住居址により東・北隅の一部が破壊される。プランは隅丸(長)方形を呈し，東西軸5.55×南北軸5.20mを平面で測り，主軸方向をN－42°－Wとる住居址である。掘り込みは直で，東側で22cmで最も深く，南側の7cmを最低とする。床面は平担で，軟弱である。柱穴はない。カマドは明確に確認できなかったが，北壁下中央に巾85cm・深さ9cmのピットがあり，その内より焼土が確認された。この他遺構として西壁下に長軸93cm・深16cmのピットを有する。

遺物　出土品の多くは須恵器であり，坏形土器・壺形土器の器種がある。坏形土器は高台を有するもの（3～5）が多く，有しないものは平底で，ヘラによる整形がなされる。土師器の多くは甕形土器で，量的に多い。

16.　第17号住居址(第8・15図，第11図版)

遺構　第16号住居址と同じく，中央南部遺構群を構成する遺構で，第18・19号住居址を切り，床面下に土壙1，2号・第30住居址がある。プランは隅丸方形で，主軸3.08×短軸3.00mを測る。主軸方向はN－35°－Eを指す。壁高は東壁17cmを最高に，他は10cm代にあり，その形態は直に近い掘り込みである。床面は中央に向けてやや盛り上がり，軟弱である。覆土中に河原石を含む。柱穴はない。カマドは北壁中央に構築され，壁外に張り出す。袖間は80cmを測り，煙道は遺構外へ65cmを確認する。

遺物　出土量は少ない。カマド周辺のものが目立ち，カマド内から甕形土器片（11・12）を確認した他は覆土中のものである。覆土中からは土師器・須恵器の坏形・甕・壺形土器を得た。土師器坏形土器は器高の高い椀形を呈す特色がある。

17.　第18号住居址(第15図，第21図版)

遺構　中央遺構地にあり，第17号住居址により切られる他，第16，19，27，32号住居址を切る。プランは不整方形を呈し，その規模は主軸（南北）2.66×東西軸3.10mで，その方向はN－40°－Eである。壁の掘り込みは直で，西壁で20cmを測る。床面は平担で，軟弱である。柱穴はない。カマドは北壁中央にあったと思われ，若干の焼土を残す。

遺物　出土量は少ない。各期の各種遺物が覆土中より検出したが，床面よりの出土遺物は糸による切離痕を有する須恵器・土師器坏形土器と，土師器甕形土器のみである。

18.　第19号住居址(第９・16・19図，21図版)

遺構　中央遺構群の南側に位置し，上部遺構として第17・18・25・26号住居址・土壙２があり，床下に第30号住居址，土壙１がある。遺構南半分は未調査である。プランは隅丸方形を呈すると思われ，東西軸7.33mを測る。主軸方向はN－45°－Wである。壁は直で床面は平担で軟弱である。柱穴は北壁よりに２個確認され，４本柱方形配列と推定される。カマドは北壁中央に設けられ，両袖形態になる。主軸150cm×袖間(60)cmで，粘土製であるが，右側袖部先端は第26号住居址により壊される。内に焼土を残す。煙道は壁外に30cm半円筒形で確認した他，覆土下面より自然石を確認した。

遺物　完形に近いものは坏形土器２点のみで，他は破片であり，甕形土器片の出土が比較的少ない。器種として須恵器蓋形土器（第16図16）と椀形（17）及び同形で口縁部が外反する坏形土器（18～21）・手捏形土器（22）・高坏形土器（23・24）があり，甕形土器は筒状器形になると思われる体部の破片がある。

19.　第20号住居址(第８・17図，第13・21図版)

遺構　中央遺構群の北にあり，第21号住居址と重複する。プランは東壁が長くなる不整方形を呈し，その規模は主軸が3.65×南北軸3.70mで，主軸方向はN－40°W－を指す。壁は直に近い状態で検出され，壁高は東西南北順で記すと，20・19・19・21cmを測る。床面は平担で軟弱である。カマドは北壁中央にあり，両袖型を呈し，袖先端に自然石を立てるが，方向は北に傾く。この規模は主軸85cm・袖間45cmである。柱穴，支石の痕跡は確認できなかった。この床面及び床面直上より河原石を確認した。

遺物　カマド周辺から主として出土するが，その量は多くない。坏形土器は椀形ものを主とし，口縁部が外反するものと，直立するもの(４)があり，内面を黒色処理されたものもある。高坏形土器（第17図５・６）は体部の稜が不明確で坏部は口縁が外開する器形になり，脚部は直線的外形を有する筒状で，袖部は外開する器形が多い。甑形土器（７）は２個体分検出して

い，最大径は口縁端部にあり，体部が弯曲し，底部に直線につらなり，底部に一孔を有する器形になる。この他甕形土器（8～10）があり，頸部が強く屈開し，体部に最大径を有し，球形に近い形態（8）と口縁部に最大径があり，頸部下は烏帽子形になり，底部は平底になる。この他底部として，球形体部に接続すると思われるものに中央付近に小さい上底になるもの(10)がある。

20. 第21号住居址(第9図，第13図版)

遺構 第20号住居址により，西壁が破壊される住居址で，プランは不整方形であり，その規模は東西軸3.80×南北軸3.18mである。長軸方向はほぼ西にある。掘り込みは直に近く，各壁20cm前後である。床面は平担で軟弱である。カマドの構築位置は不明であり，西壁に予想されるが東隅付近より焼土を確認した，柱穴他床面上に認められる遺構はない。

遺物 破片のみで，出土量は多くない。検出器種には弥生時代から平安時代のものまで各種あり，床面からのものは，所謂鬼高式の土器片のみである。器形を知りうるものはない。

21. 第22号住居址(第10・18図，第14・22図版)

遺構 遺構群東側に位置し，第24号住居址を切る。プランは方形を呈し，規模は東西軸7.0×南北6.5mを測る大形のもので，主軸はN－33°－Wになる。壁は直で，東・西・南・北壁で掘り込みの深さは,40・55・30.5・39cmをそれぞれ測る。床面は平担で，柱穴間内側は堅く踏み固められてい，良好なものになる。主柱穴は方形配列の4ヶ所確認され，径30cm・深さ70cm内外のものである他，北西隅付近に径60cm前後で,深さ10～20cmの浅いピットがある。後者には焼土で埋まる例が多く見受けられる。カマドの所在は不明であるが，西壁下から東にかけての床面上に焼土が検出され，また前記したピット内が焼土で埋まることから，この付近に設けられていた可能性が強い。この他床面施設として，p.2に床面が不整な土壙状遺構（長軸86×短軸80cm）があり，主柱穴部を除いて，他は貼り床になっている。新たな知見として，各壁に添って，河原石による方形石列がある。この石列は長方形状のものが用いられ，長軸を壁に併行に並べられ，住居址内側に面をそえるという特色がある。この石列はほぼ一周するが，カマド所在地に推定される北壁中央付近には配石及び痕跡がなかった。壁と石列間は部分的に低くなるところがあるが，総じて周溝的遺構は確認できなかった。石列は床面に浅く埋め込まれ，その規模は東・西壁下で5.60m，南壁下で5.90mである。遺物は住居址全体から出土し，特に集中個所はなかった。

遺物 覆土上面からの遺物は平安時代坏形土器（第18図1～5）・蓋形土器・甕形土器片を多く得たが，床面付近から須恵器蓋形土器（6～11）・同坏形土器（17・18）・土師器同(13～16)の出土量が比較的多く目立つ。この種類の底部切離痕及び整形はヘラ状工具による。甕形土器の出土個体数はそれ程多くなく，器形を図示できるものは土師器で頸部で強く屈開し，体部が

丸味を有し，長胴化する小形のもの(20)，同形底部（23～25）と須恵器の中形甕形土器頸部付近のもの(21)，同形底部で高台を有するもの（22）と上底のもの（26）があるのみである。この他須恵器盤形土器(12)・土師器手捏形土器及び鞴口各1点出土している。

22. 第23号住居址(第9・19図，第14図版)

遺構 調査地東端に位置し，第24・31号住居址と重複し，中で最も新しい住居址である。プランは東壁がやや長くなる不整方形を呈するが，基本形は方形である。規模は主軸（南北）3.39×東西軸3.64mで，主軸方向はN－38°－Wである。掘り込みは直で，南壁47cm西壁57cmと深く，他は26cmである。床面は平担で軟弱である。柱穴はない。カマドは南壁中央に設けられ，壁外張り出し状になり，中段を有する。焼土はカマド残存内及び床面に認められる。この他住居外南北隅付近に長方形（短軸50cm・深さ32cm)のピットがあり，本遺構と同時に掘り込まれたので入口部とも推定されるが，用途は不明である。遺物はカマド内より大形甕形土器片，床面より坏形土器，紡錘車片を得た。

遺物 出土量は少なく，須恵器坏形土器（第19図4～6）・土師器同（1～3）が目立つ。土師器のものは内面黒色処理されたものが多い。この他須恵器蓋形土器片・壺形土器片（8）が出土している。

23. 第24号住居址(第19図，第14・22図版)

遺構 調査地東端遺構群中にあり，第22・23号住居址に切られる。プランは不整方形で主軸5.6×短軸5.4mを測る。主軸方向はN－50°－Eである。掘り込みは確認面より各壁共16cm内外である。床面は平坦で軟弱である。柱穴は1ヶ確認したが，その状態から4本柱方形配列になると思われる。カマドは東壁中央にあり，所謂粘土製両袖型で，袖長80cm，焚口38cmを測る。煙道は外へ延び1.2mを測り，先端は丸く焼土を残す。

遺物 出土量は少ない。土師器坏形土器・甕形土器片が多く出土しており，図示できるものはないが，覆土中より須恵器甕形土器が約2分1個体出土したので，本住居址出土の遺物として提示する（9）。

24. 第25号住居址(第9・19図，第15・22図版)

遺構 調査地中央部遺構群内にあり，第19・26号住居址より新しく，その方向は前記住居址と近似する。掘り込みは第16号住居址の床面下にあるため，本来の深さは不明であるが確認値は各壁とも5cm内外である。規模は東西軸4.35mであるが，南半分は調査地外で，校庭下にある。カマドは北壁中央にあり，両袖型で，長さ65cm，袖間45cmを測る。その他の遺構は未確認である。床面は平担で，軟弱である。

遺物　出土量は少ない。図示できるものは坏形土器，甕形土器の２点（第19図10・11）にすぎないが，器種としてはこの他高坏形土器がある。10の底部に焼成前に付されたＸ字形の刻印がある。

25.　第26号住居址（第９図）

遺構　中央遺構群の最南端近くに位置し，第19号住居址を切るが，その規模は不明である。平安時代の遺構とも考えられる。

遺物　本住居址に確実につく遺物はないが，床面付近より土師器坏形土器・甕形土器片を数点得たのみである。底部はヘラ状工具整形である。

26.　第27号住居址（第10・19図，第11・16図版）

遺構　中央部遺構群内にあり，第16・18号住居址を切る。プランは方形で主軸2.65×東西軸3.10mの規模で，主軸方向をＮ－40°－Ｅをとる住居址である。壁は直に近く，その深さは確認値で北壁48cm，南壁14cm，東壁13cm，西壁30cmを測る。床面は平担で，軟弱である。主柱穴は方形配列を基本とするようであるが，カマド付近になく西南隅付近のものは径10cm深さ5cmと浅い。他は径20～25cm・深さ15cmである。カマドは北壁中央より東に位置し，本調査で検出した住居址内では位置的に特異である。形態は両袖形で，袖間65cm・奥行30cmと小規模なものである。内部及びカマド右側に焼土を検出した。他の遺構は認められなく，遺物も散見する程度の出土状態である。

遺物　出土量は少なく上部覆土中より，須恵器蓋形土器（第19図12），甕形土器（14）をはじめ，土師器同種を得たが，古墳時代遺物も重複の関係から多く，13は同時代甑形土器である。

27.　第28号住居址（第11・20・23図，第16・22図版）

遺構　西側遺構群と中央遺構群の中間地点にあり，上部遺構として第11号住居址と柱穴群がある。プランは壁が円味を呈する不整隅丸方形になり，その規模は主軸4.40×短軸4.30mである。主軸の方向はＮ－35°－Ｗである。掘り込みは直に近い傾斜を有する。遺構検出の確認値で北壁4cm・南壁38cm・東壁13cm・西壁35cmを測る。柱穴は４ヶ所確認されたが，その形態は不整である。径20cm前後で，深さは10～25cmである。炉は東側柱穴間中央にあり，埋鉢炉である。この他の遺構として土壙３があるが，上部は貼り床を有する。

遺物　出土量はそれ程多くない，器種として浅鉢形土器（第20図１＝炉）壺形土器（２）甕形土器（３）のみである。深鉢形土器は内外面ともヘラにより整形され，赤色塗彩が施こされる。底部が欠損する壺形土器の口縁部は朝顔形に大きく外開し，端部は更に外反気味になり，

素直におさまる。外面整形に刷毛様痕を残し，頸部に細く，鋭い６条の平行沈線で飾る。甕形土器は口唇部が面取され，そこに無節の縄文が施こされる。この部に最大径を有する。体部は直線形になり，施文は条線による綾杉状であり，その上部の頸部は不規則な沈線文になる。

28.　第29号住居址(第５・20・21・22図，第18図版)

遺構　西側遺構群中にあり，プランは楕円に近い隅丸方形を呈し，検出した北壁一辺の規模は2.9mを計測する。壁高は北で28cm，東で32cm，西で30cmで，その状態は緩傾斜になる。床面は中央に向け幾分凹み，軟弱である。また床面に中央に向け炭化材を残す。北壁西北隅付近におびただしい量の土器集中ヶ所があった。その状態は，現位置埋没状態というよりも集積された状況の出土であった。

遺物　壺形態には２種あり，所謂受口の，口縁部が立ち上り，頸部径が大きく，中位に文様帯隆起を有するもので，文様構成は口縁部が縄文地に棒状工具による一条の波状文的沈線で飾られる他，頸部の隆起上を，前記工具による押し引きを有し，その上下に三条の沈線をめぐらすものの他（第20図４）頸部より立ち上がった口縁が素直に外開し，端部が面取りされ口縁端部に縄文が施こされ，頸部に３条単位の沈線をめぐらす。６の内面は赤色塗彩される。整形は刷毛を主体とし，ナデ整形である。体部は平行沈線文及び山形沈線文による区画の中に縄文地を基本としたもの(14)，それに山形文等を組み合わせたもの（17，18）の他無文のものがある(15)。第22図15の外面は赤色塗彩される。甕形土器には大小あり，その形態は口縁が頸部より強く外開するするものが多くあるが，体部形態が異なる。甕形土器において小・中・大形の形態があり，基本形態は口縁部が外開し，肩部で張った後，素直に底部に連結する。最大径は口縁部又は体部上位にある。これらの施文は口縁端部において縄文を主とするが，時計廻りに棒状工具による押し引きのものもある(第20図10)。頸部より体部にかけての施文は波状文を主体とし，頸部にボタン状突起を貼付し垂下する櫛状工具による条線で飾るもの（８）及び同手法でボタン状突起を有しないも（９，10）の他，頸部に一条の波状文をめぐらし体部を綾杉状条線で飾るもの（11）に斜行短線文によるもの（12・13）がある。鉢形土器は口縁部が内弯し，赤色塗彩され，口縁部に小突起が貼付される。高坏形土器には２種あり，脚部が大きく外開し，ラッパ状になるもの（15）と，筒形を呈し器高の高いもので赤色塗彩されるもの（16）である。底部の破片が多く出土しており，第20図17・18は小形甕形土器にまた第22図１・２は同種大形のもので，他は壺形土器のそれであろう。これらは上底気味になり，１には籾圧痕が残る。

29.　第30号住居址(第11・22図)

遺構　中央住居址群のほぼ中央にあり，第11・18・27号住居址，土坑１・２に切られる。この住居址はこれら住居址群内で最も古い。プランは東西3.0×南北2.8mの不整方形を呈する。

主軸方向はN48°Wである。掘り込みは遺構確認値で10～15cmで壁は傾斜を有する。床面は軟弱で平担である。柱穴及び炉はない。

遺物　出土量の多い割りには器形全体を知りうるものはない，器形を確認できるものは壺形土器及び甕形土器・鉢形土器にすぎない。壺形土器は口縁部が立ち上がるか内傾するものを主に頸部がしまり，肩部が張る器形になる。口縁部の施文は縄文を主とし（第22図22），端部には同種縄文を施こされるものが多い。頸部・体部の文様は横位に平行及び山形沈線，間を縄文・押し引き列点文で埋めるものがあり，更に垂下する沈線内に平行条線及び列点を境いに区画した内を櫛描波状文による施文がある(29・25)。甕形土器には大小２種あり，小形のものの施文は横位の波状文を主とするのにたいし，大形のものには綾杉状文を施すもの(31)がある。25・28は赤色塗彩される。

30.　第 31 号 住 居 址

遺構　東側遺構群内にあり，第23号住居址に切られる。規模は東西軸3.6mを計測する方形プランを呈する住居址である。主軸は第23号住居址と近似する。壁は直に近いが，掘り込みは確認値で10～20cmの範囲にある。床面は軟弱で平担である。

遺物　出土量は少ない。坏形土器・甕形土器を主とす，土師器・須恵器である。

31.　第 32 号 住 居 址

遺構　中央住居址群内にあり，第30号住居址に切られ，この検出遺構内で最も古い住居址である。第17．28号住居址内では壁をわずかに有し，第30号住居址では床面を有しない。調査後の精査においても南側未調査地においても，生活面の重複からその痕跡がなかった。

遺物　出土遺物は弥生中期に比定される甕形土器片・壺形土器片のみで，他のものはない。

第２節　土　　坑

1．　土坑１（第11・21図）

遺構　第31号住居址中にあり，主軸をほぼ南北に向け，規模は主軸1.55×東西(短)軸1.1mの不整楕円形を呈する。深さは第30号住居址床面下8cmである。漆黒の炭化物・水分を含んだ砂質土である。

遺物　出土量は比較的多いが，すべて小破片である。第30号住居址出土の遺物と器種文様構成はほとんど変化なく，ただ石器として石錐が出土している。頁岩製である。

2．　土坑２（第11図）

遺構　中央住居址群第17号住居址により破壊されている関係から，第17号住居址に次ぐ時期の所産と推定される，プランは不整長楕円形を呈し，主軸（東西）1.6×短軸0.64mを測る。主軸方向はN120°Wである。深さは上面27cmである。覆土は黒褐色砂質土である。

遺物　出土量は皆無といってよく，覆土中より平安時代に比定される土師器坏・甕形土器及び須恵器坏形土器片を得たのみである。

3．土坑3（第11図，第17図版）

遺構　第28号住居址内にあり，上部は同住居址により貼り床される。プランは長方形を呈し，主軸（南北）2.3×短辺1.6mを測り，深さは第28号住居址床面より7cmを計測する。覆土は同一土層であり，水分を多く含んで炭化物混りの黒漆色を呈する砂質土である。

遺物　上部遺構と同じ時期に比定される弥生時代中期後半の壺形土器片を数点含む程度である。

4．土　坑4

遺構　第14号住址に切られるもので，前記住居址より新しい。プランは不整隅丸円形を呈し，主軸（東西）1.5m×短軸1.15mで，深さ24cmを計測する。床面は舟底になる。

遺物　第14号住居址と同時代の甕形・壺形土器片が出土している。

第3節　柱　穴　群（第11図）

遺構　第11号住居址の上部及び周辺に認められたが，建物址の認定される統一性は認められない。プランは径20～70cmの円形を呈し，深さは26cm～57cmを計測する。掘り方内に柱痕はなく，素直におさまっている。覆土は黒褐色粘質土である。

遺物　柱穴内よりの遺物はない。ただ第11住居址覆土中より出土した「専司」を刻字した土器片の積極的に付属する遺構としてここに位置づくものと思われるが，遺構が不明であるので断定できない。

この土器は須恵器高台付坏形土器である。高台は台形状を呈し，坏部底部はロクロ回転によるヘラ削りが行なわれ丸味を有する。この底部外面に刻字が施こされる。青灰色を呈し，焼成は良好。

第４節　その他の遺物(第21図・第23図版)

遺構に伴もなわない遺物を総括する。時期的には前出の各遺構出土したものの内に含まわれるものと思われるが，完形及び，それに近いものを図示した。12・13は弥生時代遺物で，14似下は各種須恵器奈良時代から平安時代のものである。この他被片として多量にある。

第５節　土層序(第17図版)

削平地表面はグランドレベルで標高358m であり，それとほぼ同レベルである。遺構確認地（第11号住居址付近）で356.63mの数値を得，その差は1.4m 程である。更に住居址の掘り込みを加え深くなるのであるが，基本的土層序として上層から第18号住居址付近をとると，黄褐色砂層土層（7cm・埋土）・黒褐色砂質土（黒色粘質土ブロック含・32cm），淡黒色砂層（46cm），淡黄褐色砂層（19cm），淡黒褐色粘質土層（8cm）黒褐色粘質土（包含層30cm）黄色砂質土層になる。尚この土層は西に高く，東に低くなり同レベルに近いゆるい傾斜になる。

第4章　結　　語

本調査は東校舎第Ⅰ期分(約780m²)と部分的なものであり，また実質調査期間が15日と短かいものであったが，関係各位の努力と協力によって，本遺跡内容を記録として保存するという当初の目的及び，第3章で述べたとおりの成果を上げることができた。

さて，今回の調査をまとめるにあたって，来年度西半分改築の第Ⅱ期工事が予定されているため，総括的まとめは第2次調査結果にあわせるものとし，ここでは検出遺構及び遺物を中心に本調査をまとめることとする。

遺跡は弥生時代中期から平安時代にかけての複合遺跡で，弥生時代住居址4軒(第14・28・29・30号)・土壙3基(1・3・4)を，古墳時代住居址11軒(第1・2・3・9・15・19・20・21・24・25・26号)，奈良時代住居址3軒(第10・16・22号・)柱穴群，平安時代住居址11軒(第4・5・8・11・12・13・17・18・23・27・31号)・土壙1基(2)及び時期不明の住居址3軒(第5・6・32号)をそれぞれ検出・確認した・弥生時代については当初想定した箱清水期の遺構が検出されずに，それよりも古い栗林期及び最近注目されている吉田式土器を主流とする中期末葉から後期に移行する段階のもののみで，吉田式文北圏の内容把握に重要な調査の一つになるであろうし，弥生時代遺跡立地の空間的あり方を考えさせる調査でもあった。遺物としては前章で記したとおりであり完形品が少なく，全形を知りうるものがないのは残念である。石器はこの時期まで，太形蛤刃石斧・磨製石鏃・同石包丁が付属するようである。古墳時代・平安時代は本調査地において最大密集の集落址であり，第15号住居址をのぞいては複雑に重複する。古墳時代住居址ではカマドが北壁中位付近に設置されるものが大部分であるが，第15・21号住居址は西壁にもうけられており，時間的差をうかがわせる。平安時代もこの傾向にあるが，古墳時代程一律的ではない。本調査で特記すべきものに奈良時代の遺構・遺物がある。善光寺平において，明確なる住居址を確認したものは少なく，また第22号住居址においては楕円形自然石が直列に壁直下に敷並べた珍らしい住居形態を示すもので，他に例がない。カマドが明確でなく，今後の調査に期待される。遺物は須恵器を中心に出土しており，煮沸形態の土器を除き他は土師器のその量をはるかに凌駕する。この他遺構及び包含層からの出土するものもこの傾向にあり，須恵器生産の増大をものがたるものであろう，この時期の特記遺物として，「専司」の刻字須恵器坏形土器がある。底部のみの破片で全体を知り得ないのは残念であるが，刻字は焼成前になされており，その筆跡はしっかりしたもので，字句とともに役所的施設又は役職の存在をうかがせる。以上本調査をかいつまんでみたのであるが，塩崎遺跡群中の一地点にすぎず，また来年度の調査で，この遺構群の広がり，性格がより明確に把握できるものと期待し，結論をもち越す。

出土土器一覧表

第 1 号住居址（第12図）

遺物番号	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土状
1	高坏	3.4	9.3	6.0	口縁部は内弯・丸底気味	ヨコヘラミガキ・ヨコヘラケズリ	小砂	良好	赤褐色	灰褐色	覆土
2	〃				椀形・丸底気味・内面に一段あり	ヨコナデ・タテヘラミガキ	〃（多）	〃	灰褐色	黒色	〃
3	〃		16.5		脚部円筒形・裾部外開	ヘラミガキ	〃	不良	赤褐色	〃	〃
4	甕		14.4		胴部丸味・最大径・口縁部短かく外開 頸部内に稜線	ヨコナデ	小石	良好	灰褐色	灰褐色	〃
5	〃		25.3		口縁部はゆるく外反し頸部に丸味・外面に段を有する	ヨコナデ	〃	不良	〃	赤褐色	〃
6	〃	29.1	16.6	5.3	口縁部に最大径・外開・胴部は長胴・平底	内面ヘラ状工具によるヨコナデのちナデ	〃	不良	〃	灰褐色	P 6 内
7	〃	37.3	19.7	6.2	同上	内面上部ヘラヨコナデ・外面ヘラ状工具によるタテナデ	〃	良好	赤褐色	〃	カマド
8	〃	39.2	21.2	7.8	同上・体部に丸味	内面ヨコナデ・外面ヘラ状工具によるタテナデ	〃	〃	灰褐色	灰茶色	カマド
9	〃			6.1	底部でややくびれ・上底気味	内面タテヘラナデ・外面タテナデ	小砂	〃	暗褐色	暗褐色	覆土

第 4 号住居址（第13図）

1	甕		25.9		口縁部短かく立ち上がり・端部は折返し最大径は肩部	ロクロ整形	小石	良好	青黒色	青灰色	覆土
2	土錘	3.8	7.8	内径 2.0			小砂	〃	赤褐色	赤褐色	床面

第 8 号住居址（第13図）

3	蓋	2.8	9.8	0.8	天井部平担・体部直線的・口縁端部嘴状 擬宝珠つまみ	ロクロ整形・天井部ヘラケズリ	小砂	良好	青灰色	青灰色	覆土
4	〃			3.9	天井部平担・擬宝珠つまみ	〃 ・ 〃	小石	〃	灰青色	灰青色	〃
5	坏	3.7	13.7	6.8	体部丸味・口縁部直線的・外反	〃 ・底部糸切りのち外面ヘラケズリ	小石（多）	〃	〃	黒褐色	〃
6	〃		12.9		体部・口縁部直線的・口縁端部内傾	〃 ・	小砂	〃	青灰色	青灰色	〃
7	〃		13.5		体部・口縁部直線的	〃 ・	〃	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土
8	坏		15.0		体部・口縁部直線的	ロクロ整形	小砂	良好	灰白色	灰白色	覆
9	〃		13.4		〃 ・ 口縁端部内傾	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
10	〃		14.5		〃 ・ 〃・ 外反・上底	〃 ・底部ヘラ切離痕	〃	〃	灰白色	灰白色	〃
11	〃		13.3		〃 〃 ・ 〃	〃	〃	〃	黒紫色	黒紫色	〃
12	〃	3.6	12.7	7.3	〃 口縁端部内傾	〃 ・底部ヘラ切離痕	〃 (良選)	〃	赤灰色	赤灰色	〃
13	盤				脚部	ヨコナデ	〃	〃	灰白色	灰白色	〃
14	〃				〃	〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
第9号住居址(第13図)											
15	坏	5.4	14.6		口縁部外開・体部・底部丸味	ヨコヘラミガキ	小砂	良好	灰褐色	黒 色	覆
16	瓶		13.9		口縁部外反・頸部立ち上り・体部丸味	ヨコ・タテナデ・タテナデ	小石	不良	暗褐色	灰褐色	〃
17	〃				平底・一孔	ヨコナデ・タテナデ	〃	〃	〃	赤褐色	〃
18	〃			5.9	丸底・ 〃	〃 ・ 〃	〃	良好	〃	灰褐色	〃
19	甕			6.6	平(上)底木葉痕・体部丸味	内面ヘラ状工具によるヨコタテナデ	〃	不良	〃	〃	〃
第10号住居址(第14図)											
20	蓋				擬宝珠形・天井部内弯	ロクロ整形・ヘラケズリ	小砂	良好	青灰色	青灰色	覆
21	〃	3.1	14.9		偏平擬宝珠形・ 〃 ・口縁端部嘴状	〃 ・ 〃	〃	〃	暗褐色	暗褐色	〃
22	〃		15.6		天井部偏平・体部直線的・天井部外反	〃 ・ 〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
23	〃		15.3		体部直線的・口縁端部嘴状・外反	〃 ・ 〃	〃	〃	灰白色	灰白色	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土地
24	坏			7.5	坏形・体部直立的・底部丸味	ロクロ整形・底部ヘラ切離	小砂	良好	青灰色	青灰色	床面
25	〃	3.9	12.3	7.9	〃・〃 ・口縁部外反・底部平底	〃・〃	〃	〃	〃	〃	覆土
26	〃	3.2	15.4	12.1	皿形・体部短かく・口縁部外反り	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
27	〃	3.7	15.1	9.7	坏形・体部直線・外開・高台外反	〃・〃 ・高台付着	〃	〃	〃	〃	床面
28	〃	3.0	14.7	10.1	〃・〃・〃・〃	〃・〃・〃	〃	〃	灰青色	灰青色	覆土
29	〃		17.1		〃・〃・〃・〃	〃・〃・〃	〃	〃	黒紫色	黒紫色	〃
30	〃 (高坏)		17.8		〃・〃・〃・〃	〃・〃 ・ヨコナデ	〃	〃	灰青色	灰青色	〃
1	高坏	13.4	17.5	13.0	坏部皿形・脚部円筒・裾部外開・端部嘴状	〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	床面
2	〃				〃(?)・〃	〃	〃	〃	赤褐色	赤褐色	覆土
3	甕		31.2		口縁部外開端部立ち上る・頸部立ち上り	〃	小石	〃	青灰色	青灰色	床面
4	〃		12.8		同上・最大径肩部	〃	〃	〃	赤茶色	赤茶色	覆土
5	〃		6.0		平肩	ヨコナデ・低部ヘラケズリ	〃	〃	紫灰色	紫灰色	〃

第11号住居址(第14図)

6	坏	3.8	12.7	5.2	口縁部直線的・体部弯曲・上底	ロクロ整形・糸切り	小砂	良好	青灰色	青灰色	貯蔵穴
7	〃	4.1	13.5	5.5	〃 ・上底	〃・〃	〃	〃	灰白色	灰白色	覆土
8	甕		25.1		口唇部立ち上る・体部の弯曲少ない。	〃	〃	〃	灰褐色	赤褐色	カマド
9	〃	35.6	24.9		口縁部外反・体部烏帽子状・底部丸底	上部ロクロ整形・下半ヘラケズリ・内面ヨコナデ・ヘラナデ	小石	〃	〃	〃	〃
10	盤		20.2	(3.2)	皿形・口縁端部外反・低い台付	ロクロ整形・ヘラケズリ	小砂	〃	赤灰色	青灰色	覆土

第13号住居址（第14図）

遺物番号	器種	法量（cm）			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状
		器高	口径	底径					外面	内面	
12	坏	3.6	13.2	4.8	体部直線的・上底	ロクロ整形・糸切り	小砂	良好	黒紫色	黒紫色	覆土

第14号住居址（第15図）

1	鉢		16.9		口唇部に縄文を施す・体部直線的	ヨコヘラミガキ	小砂	良好	赤褐色	灰褐色	覆土
2	壷		7.6		頸部がしまり、口縁部がひらく・頸部に低い突帯	内面—ヨコナデ口唇部にきざみ 外面—上部ヨコナデ下部タテヘラミガキ	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
3	〃		17.3		口縁部立ち上る	内面—ヨコヘラミガキ 外面—ヨコナデ	〃	不良	〃	〃	〃
4	甕		17.0		口縁部が外反し・体部中位に最大径	内面—上部ヨコナデ下部タテヘラミガキ 外面—ヨコナデ9本単位のクシ状工具による斜行条線	〃	良好	〃	黒褐色	〃
5	〃		21.1		〃 ・ 〃	内面—上部ヨコナデ下部ヨコヘラミガキ 外面—ヨコナデ7本単位のクシ状工具による斜行条線	〃（多）	不良	〃	灰白色	〃
6	〃				上底気味	内面—ヨコヘラミガキ底面一方向のヘラミガキ 外面—タテヘラミガキ	〃	良好	〃	暗褐色	〃
7	〃					内面—ヨコヘラミガキ 外面—タテヘラミガキ	〃（多）	不良	〃	赤褐色	〃

第15号住居址（第15図）

8	坏	4.8	16.2	9.6	底部ちかくに一段あり、体部直線的	ヨコヘラミガキ	小砂	良好	灰褐色	黒色	覆土
9	〃		14.8		体部は緩く屈開し、底部は丸底気味	〃	〃・良選	〃	〃	〃	〃
10	〃	4.6	14.3		口縁部屈開し、体部・底部は丸味	〃	〃・〃	〃	赤褐色	〃	〃
11	〃		13.8		〃 〃	ハケ整形のちヨコヘラミガキ	〃・〃	〃	灰褐色	〃	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土
12	坏	5.8	14.2		口縁部緩く外反・体部内傾・底部に丸味	ヘラミガキ・底部ヘラケズリのちナデ	小砂・良選	良好	赤褐色	黒色	床
13	〃		12.2		体部明確でなく・口縁部直線・底部丸味	ヨコヘラミガキ	〃・〃	〃	灰褐色	〃	〃
14	〃	4.0	9.8	5.9	口縁部直線的・内傾・蓋受部突出・底部丸味	口縁部ロクロ整形・底部回転ヘラケズリ	小砂(多)	不良	青灰色	青灰色	〃
15	高坏	12.0	14.2	10.0	口縁部直線的外開・体部に鈍い稜・脚部筒形ラッパ状	ヨコ・タテヘラミガキ・脚部に成形痕	小砂	良好	灰褐色	黒色	カマ
16	甕		16.4		頸部「く」の字形・口縁部内弯気味	6本単位のハケによるナデ	小石(多)	〃	赤褐色	赤褐色	床
17	〃		5.1		底部丸味・体部は大きく外開	ヨコナデ・タテヘラナデ	〃 〃	不良	灰褐色	灰色	〃
18	〃	37.7	18.9	4.9	長胴・最大径は体部中位・口縁部は緩く外反	外面―口縁部ヨコナデ・胴部ヘラケズリ 内面―木口状工具によるナデ・ヨコナデ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	カマ

第16号住居址(第16図)

1	坏	1.9	11.8	7.4	口縁部が大きく開く・端部面取り	ロクロの回転を利用したヨコナデ	小砂	良好	黒紫色	黒紫色	覆
2	〃		11.6		口縁部屈開・椀形	〃	〃・良選	〃	黒茶色	黒茶色	〃
3	〃			10.2	高台外開・体部椀形	〃 ・底部ヘラケズリ	小砂	〃	赤褐色	赤褐色	〃
4	〃			9.7	高台直立・体部直立	〃 ・ 〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
5	壷			7.4	高台やや外開	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	茶褐色	〃
6	〃		11.4		口縁部短かく立ち端部外反	〃 ・ 〃	〃	不良	灰白色	灰白色	〃
7	〃		6.8		高台外開・体部やや直線的	〃 ・ 〃	〃	良好	黒紫色	黒紫色	〃

第17号住居址(第16図)

8	坏	5.8	16.8	6.8	口縁部肥厚し外反・体部椀形・底部上底	ヨコヘラミガキ・底部ヘラキリ	小砂	不良	赤褐色	黒色	床
9	〃			6.0	体部椀形・底部平底	〃 ・ 〃	〃・良選	良好	灰褐色	〃	〃
10	〃	4.1	15.0	5.5	口縁部外反・体部直線的・底部上底	ロクロ整形・糸切り	〃(多)	不良	赤褐色	赤褐色	カマ

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土
11	甕		23.6		口縁部「く」の字状外開・内弯・最大径・長胴形	ロクロの回転を利用したヨコナデ	小砂	良好	赤褐色	灰褐色	カマ
12	〃		26.8		〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	〃	覆
第18号住居址(第16図)											
13	蓋	4.0	18.9		擬宝珠付・天井部直線的・口縁部直立	ロクロ整形・ヘラケズリ	小砂	良好	青灰色	白黄色	覆
14	甕		13.5		口縁部有段	〃	〃	〃	〃	青灰色	〃
15	〃		28.4		〃 ・肩部張る	〃 ・タタキメ	〃	〃	〃	〃	〃
第19号住居址(第16・17図)											
16	蓋			13.7	口縁部直立外開・体部に突起・天井部丸味	ロクロ整形・ヘラケズリ	小砂	不良	灰褐色	灰色	床
17	坏		12.7		椀形・丸底	ヨコヘラナデ	〃(多)	良好	赤褐色	赤褐色	〃
18	〃		13.5		皿形・口縁部内面に段を構成	〃	〃・良選	〃	〃	〃	〃
19	〃		14.5		椀形・口縁部外反	〃	〃・〃	〃	〃	暗褐色	〃
20	〃	6.6	12.4		〃・〃 ・面取り・丸底	〃	〃・〃	〃	暗褐色	黒色	〃
21	〃		9.4		〃・〃 ・丸底	〃	〃・〃	〃	赤褐色	灰褐色	〃
22	〃		17.6		口縁部直線的・体部内面に稜	〃	〃 (多)	不良	灰褐色	黒色	〃
23	手捏	2.9	5.0		丸底	ヨコナデ	〃	良好	赤褐色	黄褐色	〃
24	高坏		15.9		口縁部は緩く外開・底部に鈍い稜	ヨコ・タテナデミガキ	〃	〃	〃	赤褐色	〃
1	甕		15.3		頸部は「く」の字形・口縁部は外反・球形胴気味	ヨコナデ・ヘラミガキ・ハケナデ	小石(多)	〃	〃	灰褐色	〃
2	〃		16.6		〃 ・口縁部は直線的	〃	〃 〃	〃	〃	〃	〃

遺物番号	器種	法量 (cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土
3				7.2	底部凹む	ヨコナデ・ハケナデ	小石	良好	暗褐色	暗褐色	床

第20号住居址（第17図）

4	坏	5.5	14.5		椀形・丸底・体部直線的	ヨコヘラミガキ	小砂・良選	良好	黒褐色	黒褐色	床
5	〃		11.1		口縁部直線的・漸減・底部丸味	〃	〃・〃	〃	灰褐色	〃	〃
6	高坏	9.6	17.8	13.3	坏部皿形・口縁部緩く外反・脚部筒形 裾部大きく外開	ヨコ・タテヘラミガキ・ヨコナデ	〃	〃	赤褐色	赤褐色	カマ
7	甑		15.1		口縁部やや外反・砲弾形	ヨコヘラナデ	小砂	不良	〃	灰褐色	床
8	甕		15.6		頸部緩く屈開・口縁部直線的・球形胴	ヨコナデ・ハケナデ	小石	〃	〃	灰白色	カマ
9	〃	25.0	22.9	7.9	〃 〃 ・長胴 口縁部に最大径・平底	〃 ・ハケヨコ・タテナデ	〃（多）	〃	黒褐色	灰褐色	〃
10	〃			6.2	底部凹む	〃	小砂	〃	灰褐色	灰褐色	床

第22号住居址（第18図）

1	坏	4.7	12.6	5.5	椀形・上底	ロクロ整形・糸切り	小砂	良好	灰褐色	黒色	覆
2	〃	4.5	14.5	6.4	坏形・〃	〃・〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
3	〃	4.3	12.6	6.3	〃・平底	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃	3.5	13.4	5.3	椀形・上底	〃・〃	〃	〃	暗褐色	〃	
5	〃			7.2	〃・平底	〃・〃	〃	〃	青灰色	〃	
6	蓋	4.6	15.3	0.4	宝珠つまみ・天井部弯曲・口縁部外開	〃・ヘラケズリ	〃	〃	灰青色	灰青色	
7	〃	4.0	16.4	0.6	〃・天井部弯曲・〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃	

遺物番号	器種	法量（cm）			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状態
		器高	口径	底径					外面	内面	
8	蓋				偏平宝珠つまみ・天井部直線的	ロクロ整形・ヘラケズリ	小砂	良好	赤褐色	赤褐色	覆土
9	〃	3.1	14.9	0.8	〃 〃 〃 ・口縁部直立	〃 〃 〃	〃	〃	暗褐色	暗褐色	〃
10	〃		15.7		天井部直線的・口縁部はそのまま仕上げる	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	床面
11	〃		13.9		〃 ・口縁部直立	〃 〃 〃	〃	〃	青灰色	青灰色	覆土
12	盤		20.4		底部から口縁部が屈開・底部平底気味	〃 〃 〃	〃	〃	〃	〃	〃
13	坏		9.2		椀形・底部丸底気味	ヨコナデ・ヘラミガキ	〃	〃	灰褐色	灰褐色	床面
14	〃	5.1	13.9	7.5	〃・平底	〃 〃 〃 ・ヘラケズリ	〃	不良	茶褐色	黒色	〃
15	〃			7.7	〃・上底	〃 〃 〃 〃 〃	〃	〃	暗褐色	〃	〃
16	〃			7.8	〃・平底	〃 〃 〃 〃 〃	〃	良好	茶褐色	〃	〃
17	〃	5.4	15.6	6.6	坏形・口縁部直線的で肥厚・平底	ロクロ整形・ヘラケズリ	〃・良選	〃	灰白色	灰白色	〃
18	〃	3.6	12.5	0.6	〃・体部口縁部直線的・上底気味	〃 ・体部口縁部直線的・上底気味	〃	〃	〃	〃	〃
19	〃		10.8		坏形土器・口縁部内傾・体部椀形	ヨコナデ・ヘラミガキ	〃	〃	茶褐色	黒色	〃
20	甕		11.8		口縁部中位が肥厚し、以降漸減	ロクロ整形・薄手	〃	〃	赤褐色	暗褐色	〃
21	〃		16.0		頸部「く」の字・口縁端部面取り	〃 ・櫛状工具の施文	〃	〃	〃	青灰色	〃
22	〃			10.9	高台外開・体部椀形	〃 ・ヘラケズリ	〃	〃	青灰色	〃	〃
23	〃			6.2	平底	ヨコナデ	小石（多）	不良	灰黒色	暗褐色	〃
24	〃			7.4	〃	〃 ・ヘラナデ	〃	〃	灰茶色	茶褐色	〃
25	〃		5.0		〃・体部直に近い立ち上がり	ヘラケズリ・ヘラナデ・ヨコナデ	小砂	良好	赤褐色	灰褐色	〃
26	〃			11.5	付け高台・低く直立・体部直立	ロクロ整形・ヘラケズリ	〃	〃	青灰色	青灰色	覆土
27	手捏	2.8	4.8	4.1	坏形	指圧整形	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
28	鞴口		（径）6.6	（内径）2.8	円筒状	外面にタタキメあり	〃	〃	青灰色	赤褐色	〃

第23号住居址（第19図）

遺物番号	器種	法量（cm）			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調		出土状
		器高	口径	底径					外面	内面	
1	坏	6.9	18.9	8.8	椀形・底部平底・口縁部肥厚	ロクロ整形・ヘラケズリ	小砂	良好	灰褐色	黒色	覆土
2	〃	3.9	14.7	6.5	〃・上底・〃	〃・〃・糸切り	〃	〃	灰褐色	〃	床面
3	〃	4.6	16.7	7.0	坏形・〃	〃・糸切り	〃	〃	〃	〃	〃
4	〃	4.0	12.7	6.2	〃・〃	〃・〃	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
5	〃	3.9	8.1	5.8	椀形・〃	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
6	〃		12.1		〃・〃（？）・口縁部外反	〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
7	壺			13.1	肩部に丸味同下部に最大径・上底	〃・ヘラケズリ	〃	〃	灰白色	灰白色	〃
8	〃			6.1	上底	ヘラナデ	〃	〃	青白色	青白色	〃

第24号住居址（第19図）

6	甕		20.3		球形胴的・最大径は肩部・口縁部は直立・口唇部面取り	ロクロ整形・タタキメ	小砂	良好	赤灰色	赤灰色	

第25号住居址（第19図）

10	坏	4.2	12.8	6.4	体部・口縁部直線的・平底	ヨコナデ・ヘラケズリ・刻印		良好	青灰色	青灰色	
11	甕	30.0	16.2	7.6	長胴・口縁部に最大径があり・頸部より緩く外反・平底	6本単位のハケ整形・ヨコナデ		不良	灰褐色	黒褐色	

第27号住居址（第19図）

12	蓋	3.7	13.0	2.4	偏平宝珠つまみ・天井部椀形・嘴状	ロクロ整形・ヘラケズリ		良好	青灰色	青灰色	
13	甑			6.8	一孔・平底・薄手	ヨコナデ		不良	灰褐色	灰褐色	

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土状
14	甕		17.0		頸部「く」の字・口縁部肥厚・肩がはる	ロクロ整形・体部下タタキ整形	小砂	良好	青灰色	青灰色	覆土
第28号住居址(第20図)											
1	鉢		23.3		口縁部内傾・体部直線的	ヘラナデ	小砂	良好	赤色	赤色	埋甕炉
2	壺		25.2		口縁部が外反し・朝顔形態	ヨコナデ6本のハケ整形・鋭く浅い6本の沈線	〃(多)	不良	灰褐色	灰褐色	覆土
3	甕		14.3		口縁部外開・端部面取り・最大径	〃・口唇部縄文・頸部波状文・綾杉状斜行単線施文	〃	良好	褐色	〃	〃
第29号住居址(第20・21図)											
4	壺		20.7		口縁部受口・大形	ヨコナデ・ハケ整形・縄文・山形沈線文・押し引き文	小石(多)	良好	赤褐色	灰褐色	床面
5	〃		14.1		口縁部直線的・面取り・頸部つぼまる	〃・〃・〃・〃・波状文	〃	〃	灰褐色	〃	〃
6	〃		14.2		〃・〃	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	赤色	赤色	〃
7	甕		8.3		口縁部外反・最大径	〃・〃・縄文・波状文	〃	〃	赤褐色	赤褐色	〃
8	〃		15.5		〃・〃	〃・〃・波状文・ボタン状突起	〃	〃	〃	〃	〃
9	〃		22.2		〃・〃	〃・〃・〃・押引文	〃	〃	〃	〃	〃
10	〃		25.2		〃・〃・体部直線的	〃・〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃		14.6		〃・〃・口縁部面取	〃・〃・〃・〃	〃	〃	〃	灰褐色	〃
12	〃		19.5		〃・〃・〃	〃・〃・〃・〃・斜行単線文	〃	〃	〃	〃	〃
13	〃			6.5	楕形・平底	〃・〃・斜行単線文	〃	〃	黒灰色	〃	〃
14	鉢		21.2		口縁内屈・体部直線的・ボタン状突起	〃・ヘラナデ	〃	〃	赤色	赤色	〃
15	高杯				体部・脚部とも直線的外開	〃・〃	〃	〃	暗褐色	黒褐色	〃

遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出
16	高坏(?)				上部筒形・裾部素直に外開	ヨコナデ・タテヘラミガキ・ハケナデ	小砂	良好	赤色	茶褐色	床
17	甕			6.6	やや上底気味	ヨコナデ・タテヘラナデ	〃	〃	赤褐色	暗褐色	
18	〃			6.5	〃	〃・〃	〃	〃	灰褐色	灰褐色	
1	〃			9.0	〃・体部直線的	〃・〃・底部モミ圧痕	〃(多)	〃	灰白色	灰白色	
2	〃			9.3	〃・〃 外開	〃・〃	〃	〃	赤褐色	灰褐色	
3	壷			9.8	〃・〃 に大きく外開	ヨコヘラナデ・5本単位ハケナデ	〃	〃	赤色	〃	
4	〃			11.1	平底・〃	〃・6本単位ハケナデ	〃	〃	黒褐色	黒褐色	

土坑 1 (第21図)

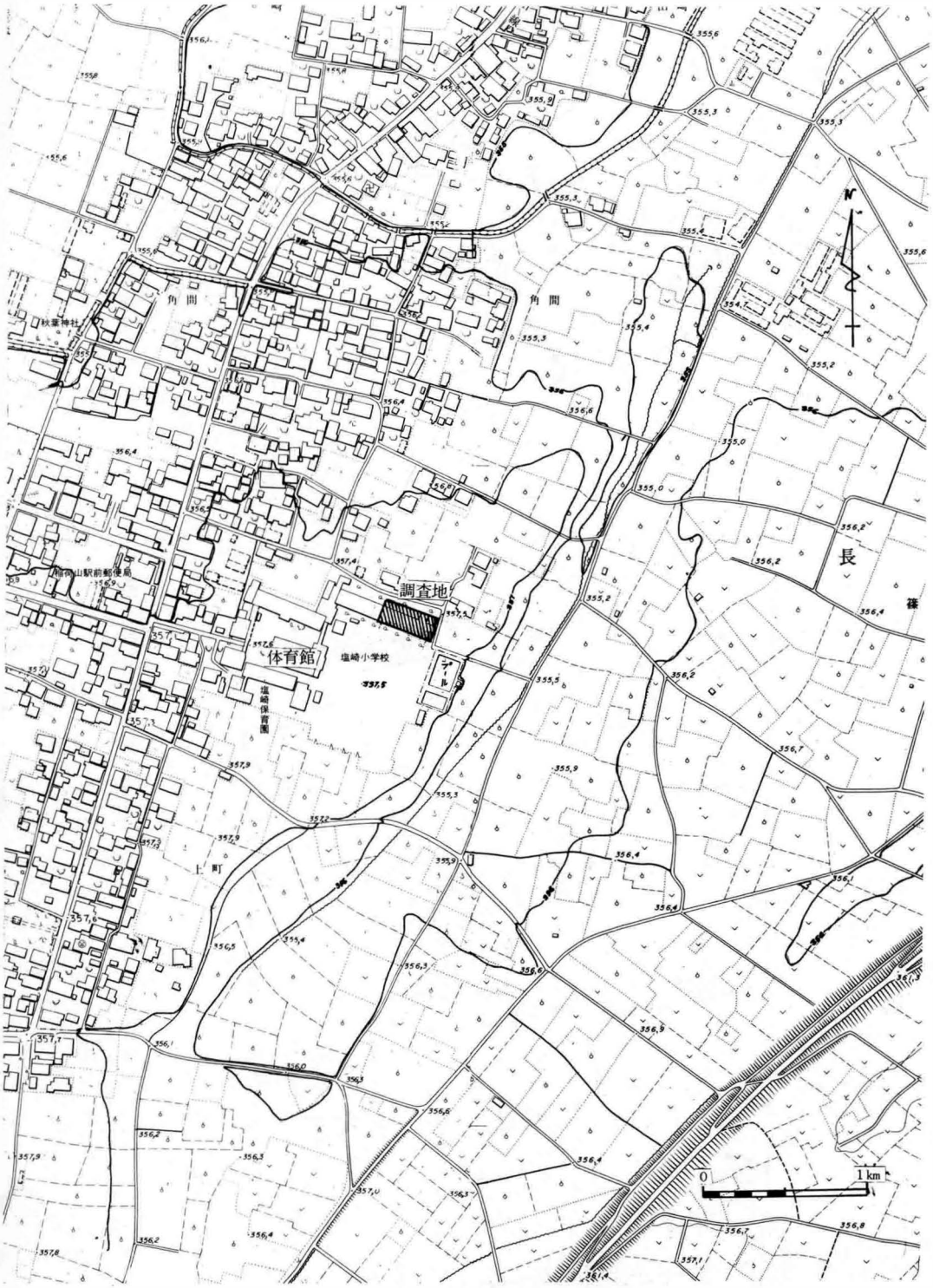
5	壷		12.5		口縁部外開・端部面取・頸部直線的	ヨコナデ・無節縄文施文	小砂	良好	赤色	灰褐色	覆
6	〃		9.1		〃・〃・〃 外開	〃 ハケナデ・縄文・平行沈線	〃	〃	灰白色	〃	
7	〃		16.2		〃・〃・大形	〃・ハケナデのちヨコナデ	〃	〃	灰褐色	〃	
8	〃				頸部文様帯で上下屈開	〃・無節縄文地・平行沈線	〃	〃	暗褐色	灰白色	
9	甕		28.7		頸部強く「く」の字形・口縁部直線的・端部面取り・体部直線的・大形	〃・ヨコヘラミガキ・ハケナデ・縄文・波状文	〃	〃	灰褐色	灰褐色	
10	壷		14.6		口縁部内弯気味・端部丸味	ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・ハケナデ・縄文・押し引き	〃	〃	赤褐色	赤褐色	
11	〃			5.3	平底	ヨコナデ・ハケナデ	〃	〃	黒褐色	灰褐色	

その他出土土器(第21図)

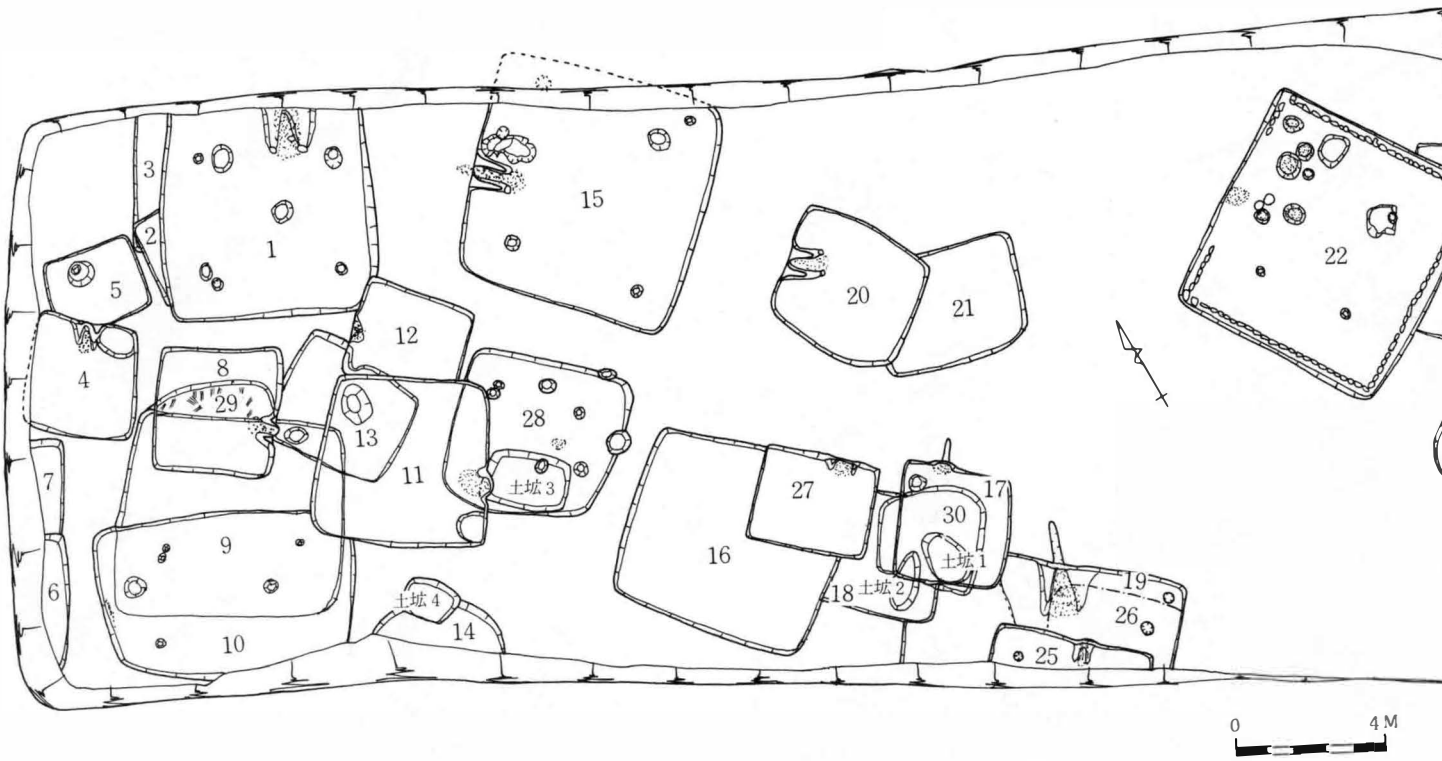
遺物番号	器種	法量(cm) 器高	口径	底径	形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調 外面	内面	出土状態
12	甕		15.7		口縁部短かく外開・端部丸味・頸部体部に丸味	ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・5本単位の工具による波状文・平行・斜行単線文	小砂	良好	暗褐色	暗褐色	包含層
13	〃(台付)				体部に丸味・脚部直線的	ヨコナデ・ヨコヘラミガキ・タテヘラナデ	〃	〃	赤色	赤色	〃
14	蓋			0.4	擬宝珠つまみ・天井部内弯	ロクロ整形	〃	〃	青灰色	灰白色	〃
15	〃		12.9		口縁部外開・天井部平坦に近い	〃 ・小形	〃	〃	灰褐色	灰褐色	〃
16	〃		15.6		口縁部外開わずかに立ち上る・ 〃	〃 ・ヘラケズリ	〃	〃	青灰色	青灰色	〃
17	坏	4.2	12.8	10.0	高台付・底部に丸味・口縁部は外開及び内傾	〃 ・ 〃	〃	〃	〃	〃	〃
18	〃	3.2	12.9	5.5	体部直線的・口縁部外反・上底	〃 ・上底・糸切り	〃	〃	灰白色	灰白色	〃
19	高坏(?)			10.5	脚部か・口縁部が直立的に立ち上がる	〃 ・ヨコナデ	〃	〃	〃	〃	〃

第1図　位置図及び周辺の遺跡(1：20,000)

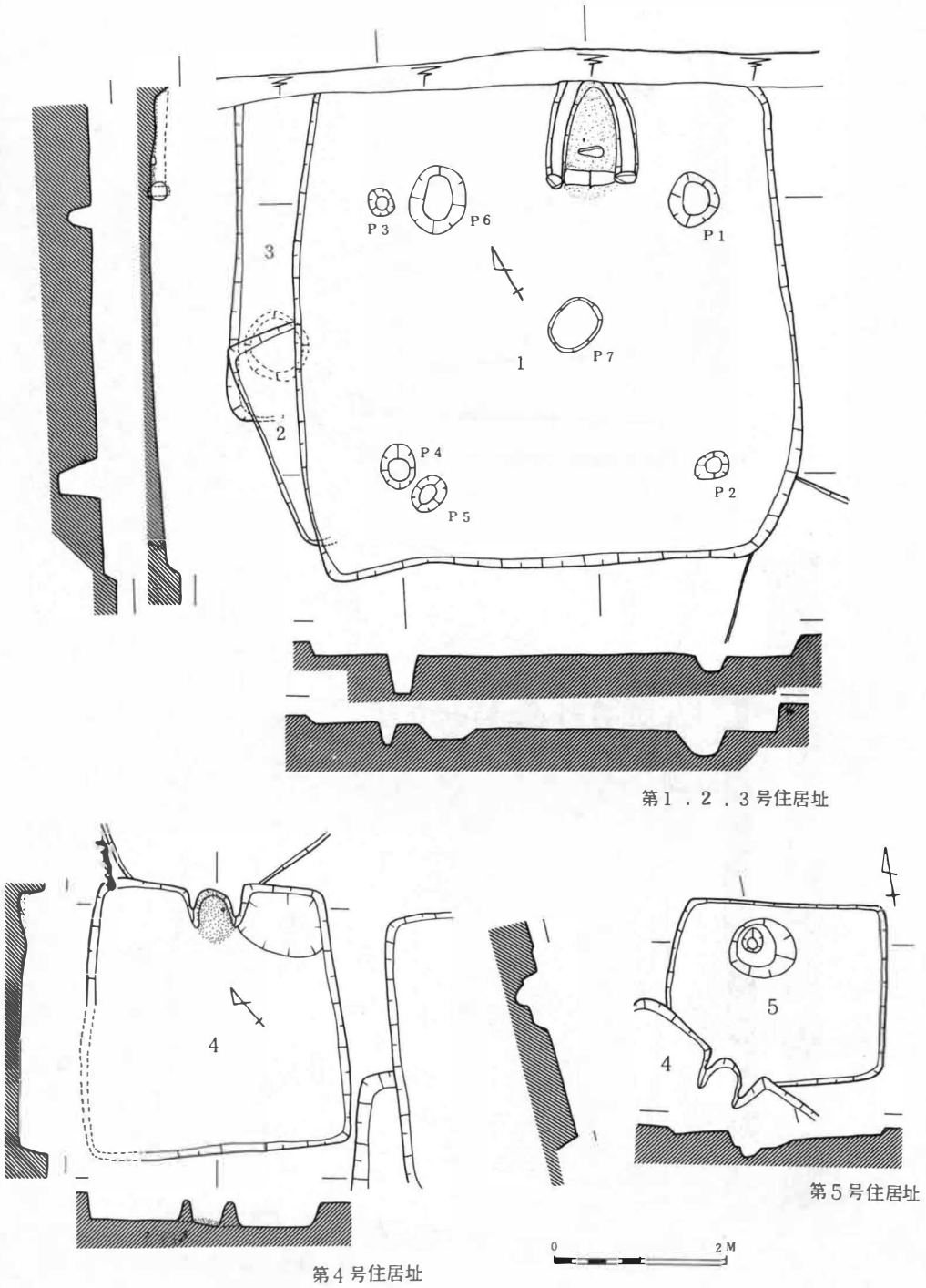
1．上見林遺跡(八ツ塚古墳群)　2．柳下遺跡　3．鶴前遺跡　4．観音下遺跡　5．戸部門遺跡　6．会下遺跡　7．立町遺跡　8．薬師山古墳群　9．将軍山古墳群　10．大伯母古墳　11．小日向古墳　12．秋葉山古墳　13．中郷神社前方後円墳(培塚)　14．鶴萩古墳　15．平古墳　16．八幡宮古墳　17．城山古墳　18．東谷古墳



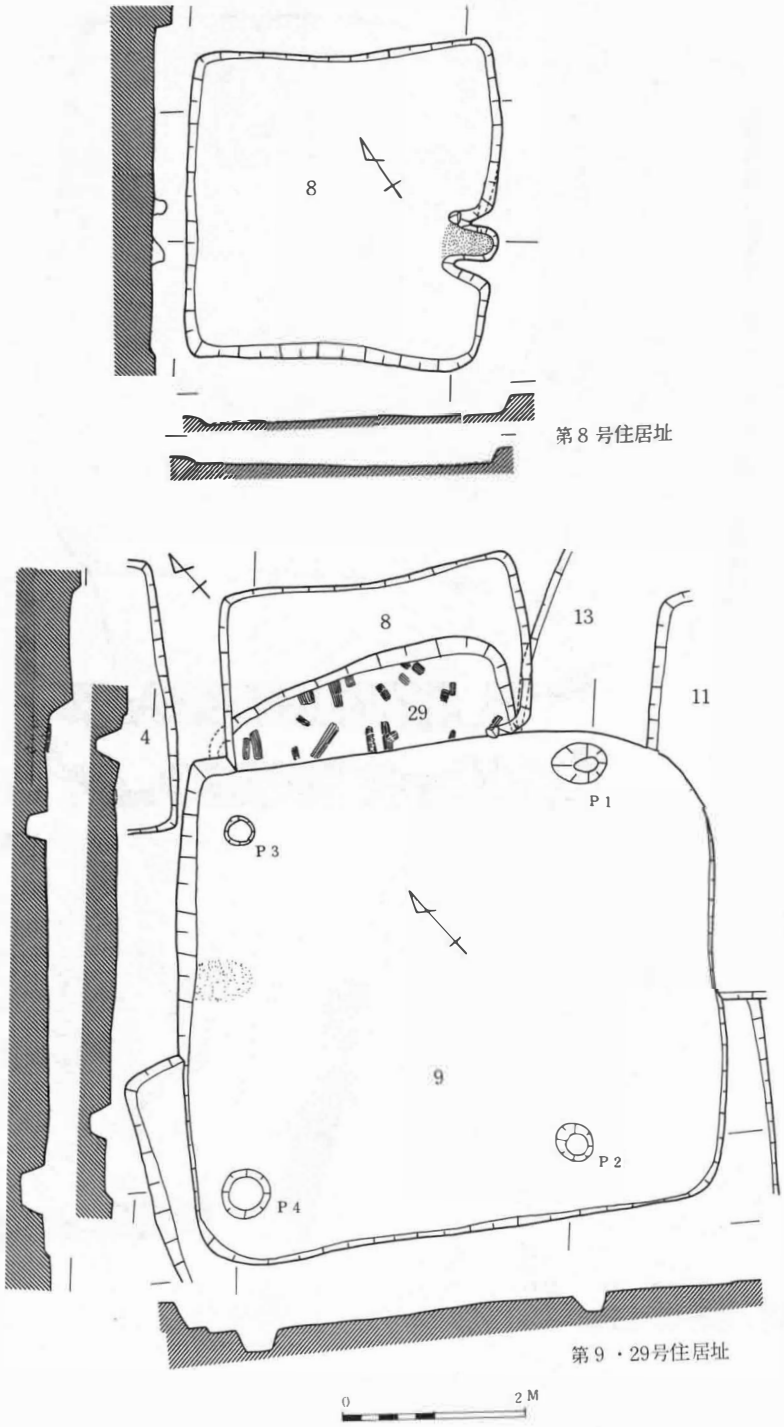
第２図　調査地及び周辺図（１：4000）



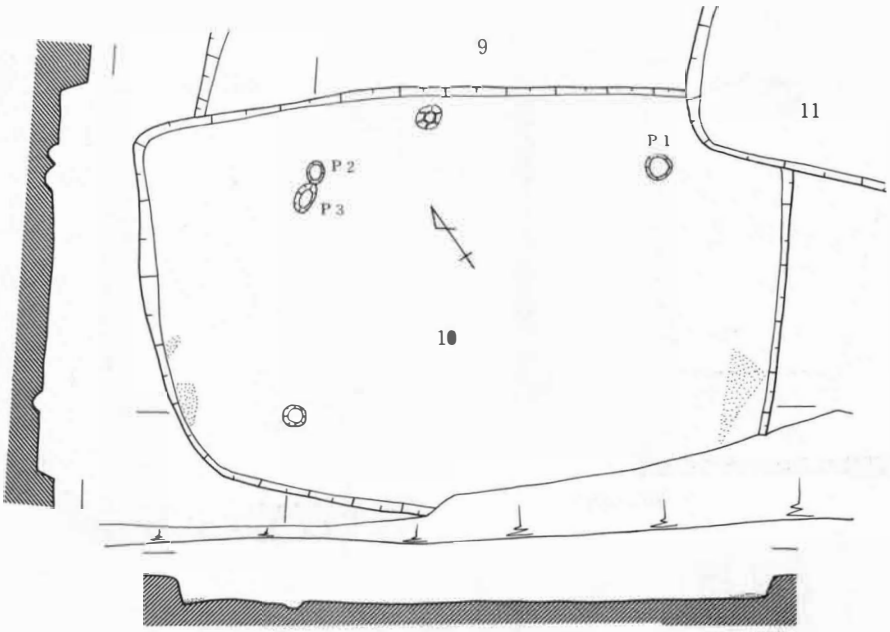
第3図　遺構分布図(1：160)



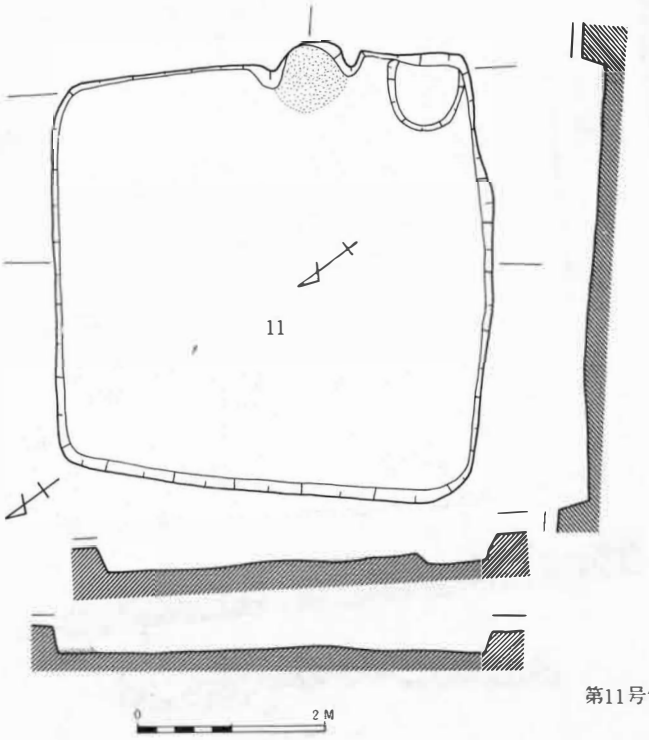
第4図　第1．2．3．4．5号住居址遺構実測図(1：80)



第5図　第8・9・29号住居址遺構実測図(1：80)

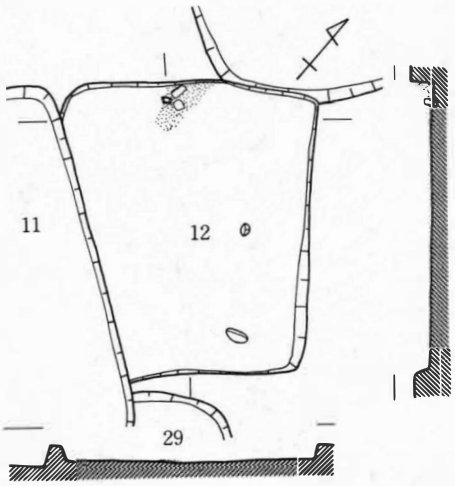


第10号住居址

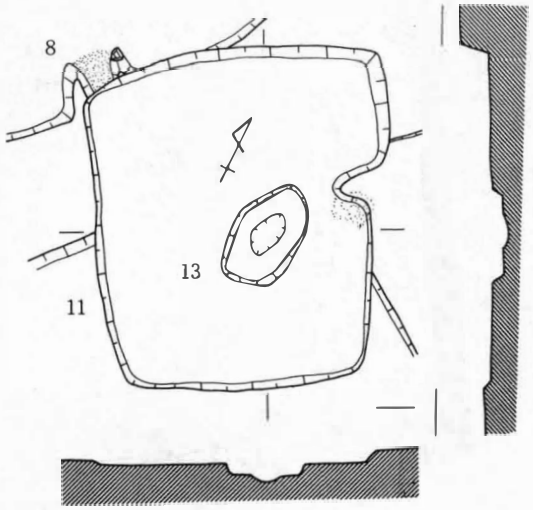


第11号住居址

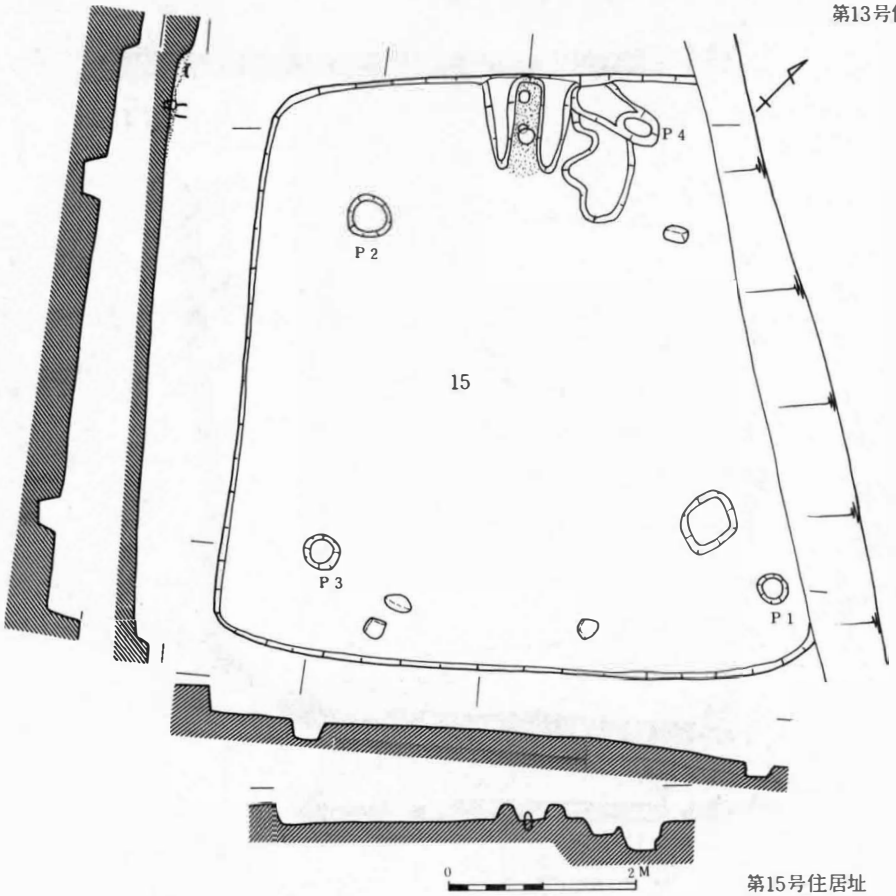
第6図　第10．11号住居址遺構実測図(1：80)



第12号住居址

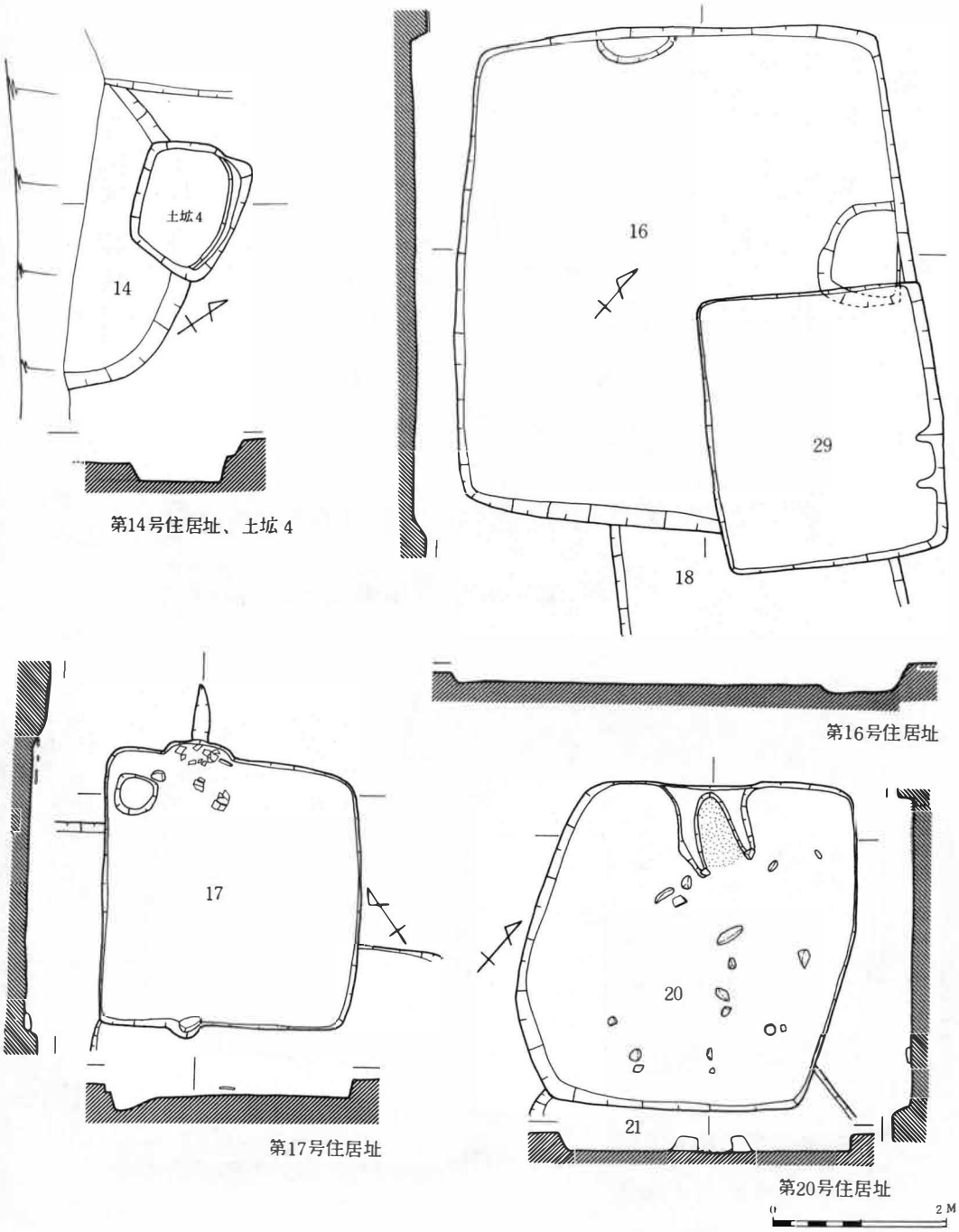


第13号住居址

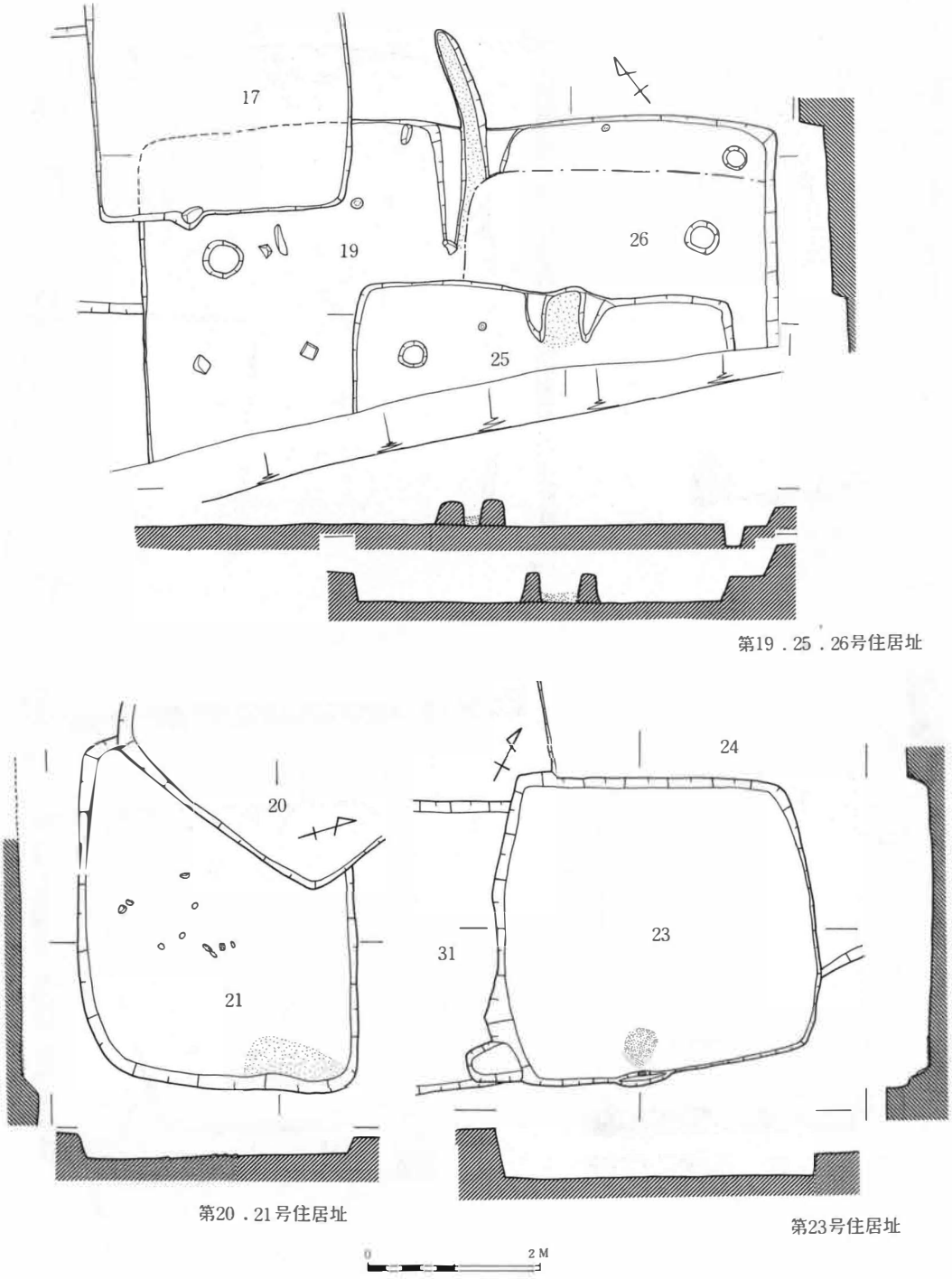


第15号住居址

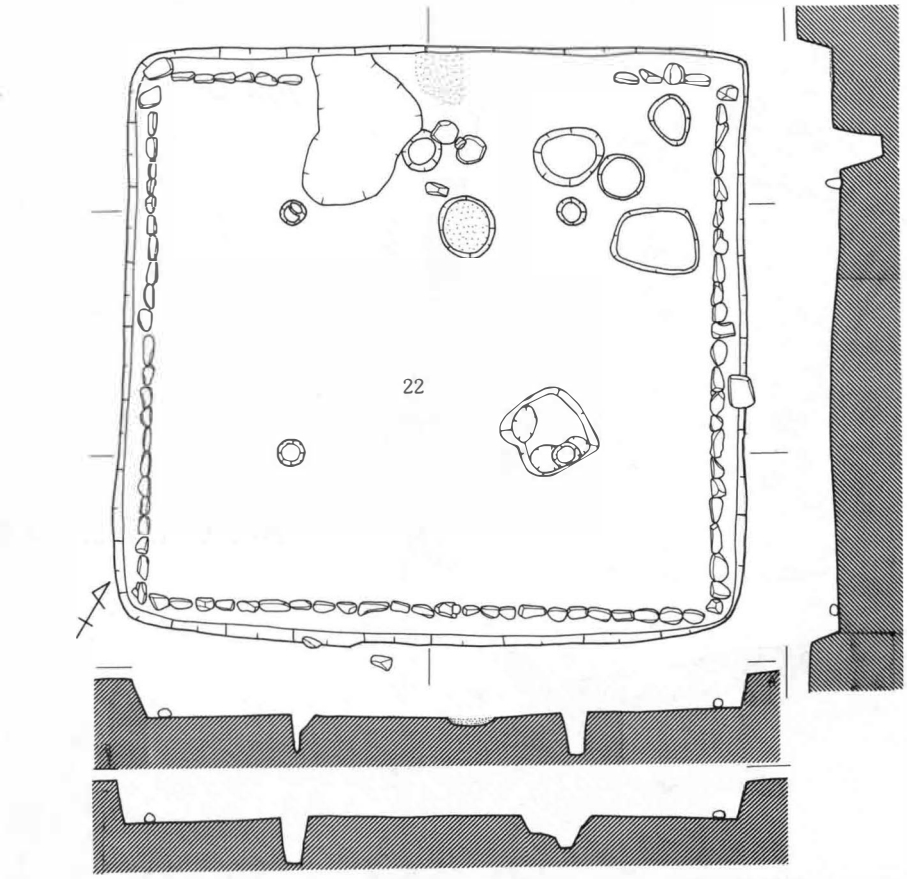
第７図　第12．13．15号住居址遺構実測図(１：80)



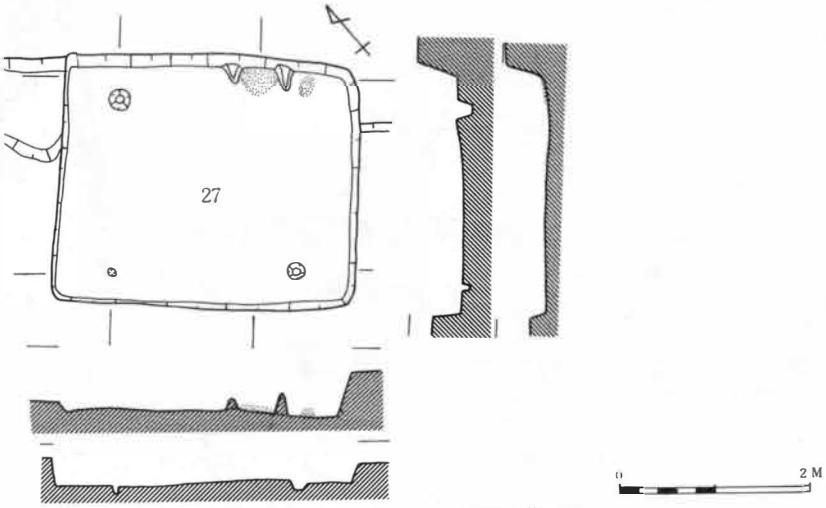
第8図　第14．16．17．20号住居址，土坑4遺構実測図(1：80)



第９図　第19．21．23．25．26号住居址遺構実測図(１：80)

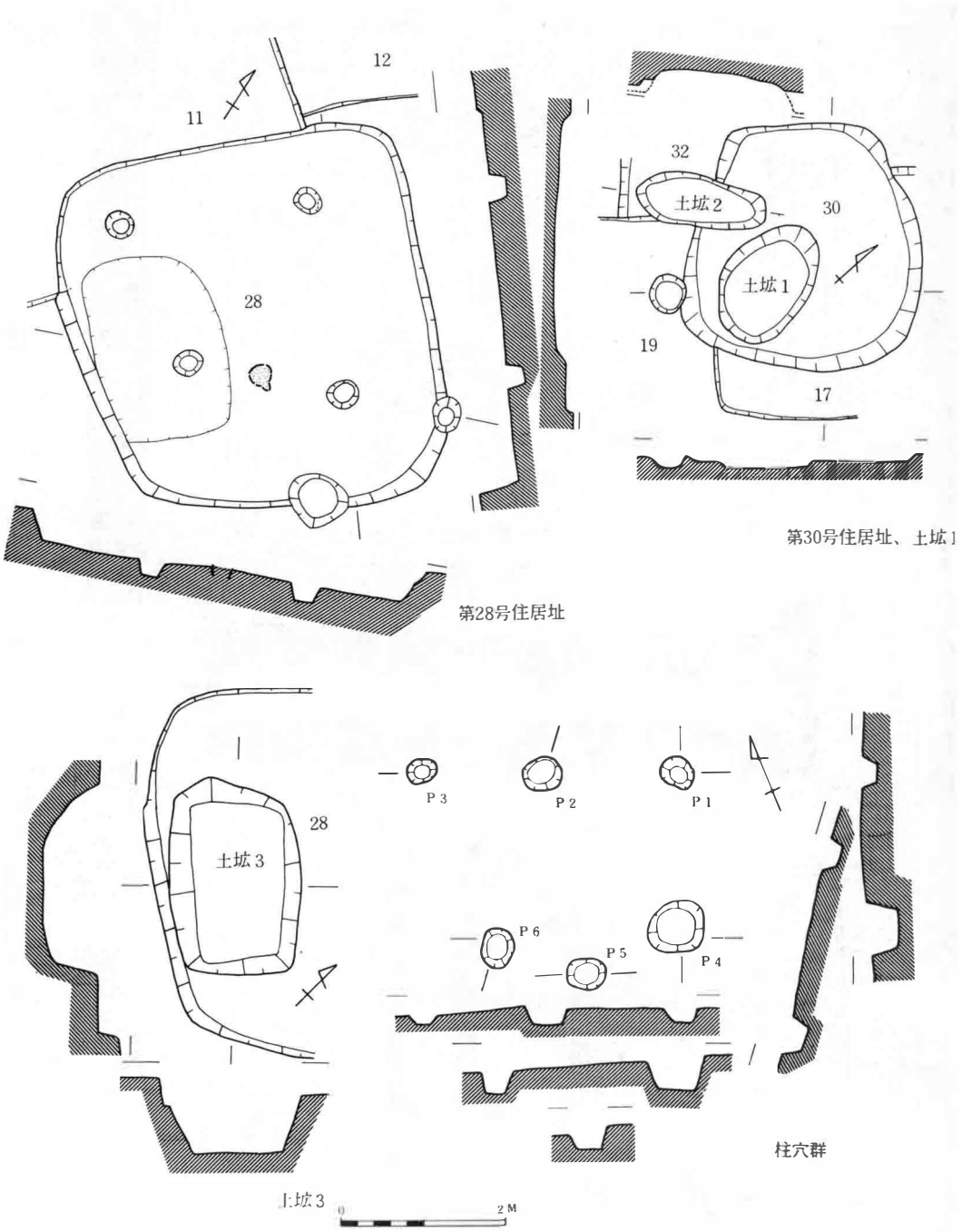


第22号住居址

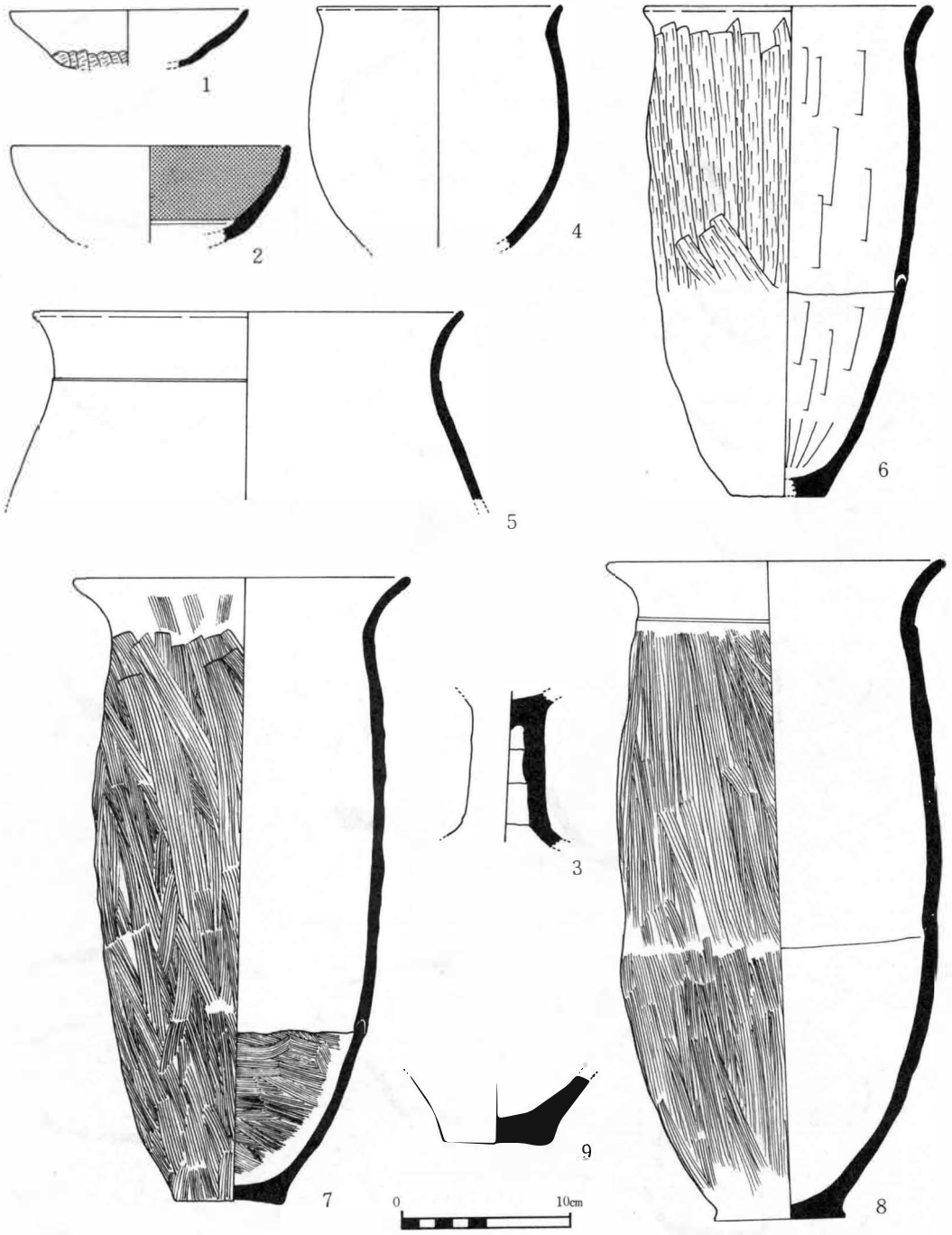


第27号住居址

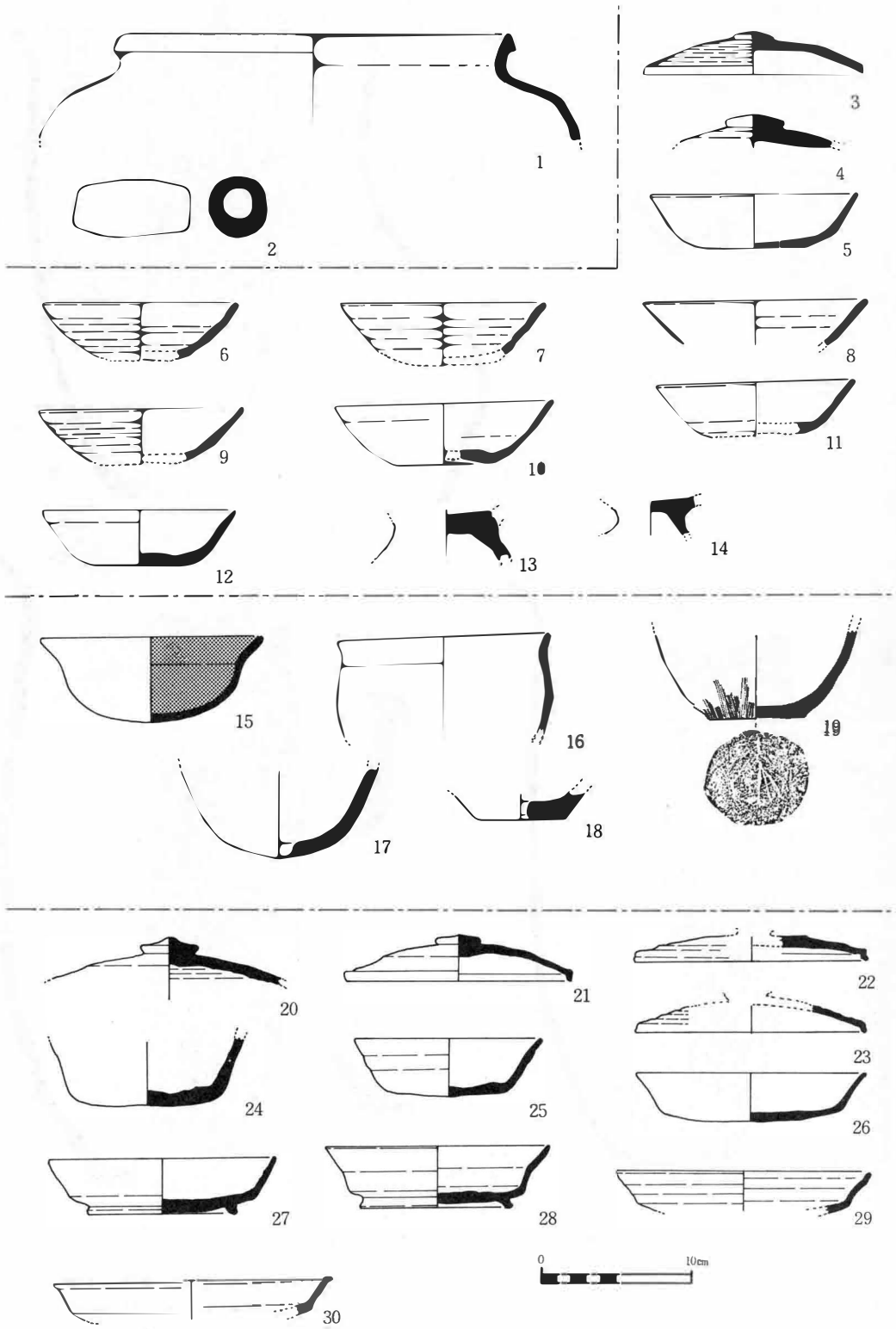
第10図　第22．27号住居址遺構実測図(1：80)



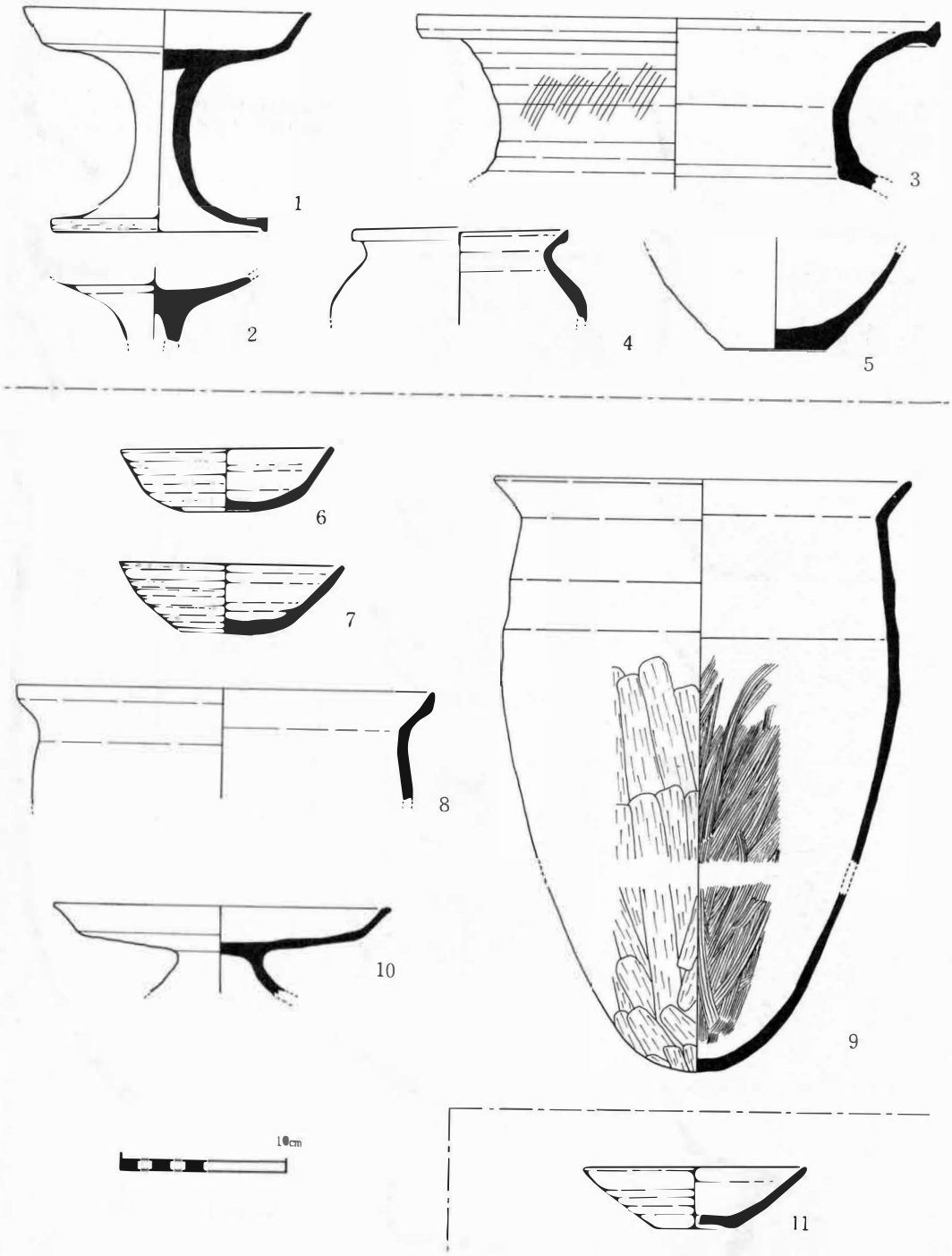
第11図　第28・30号住居址、土坑1・2・3、柱穴群遺構実測図(1：80)



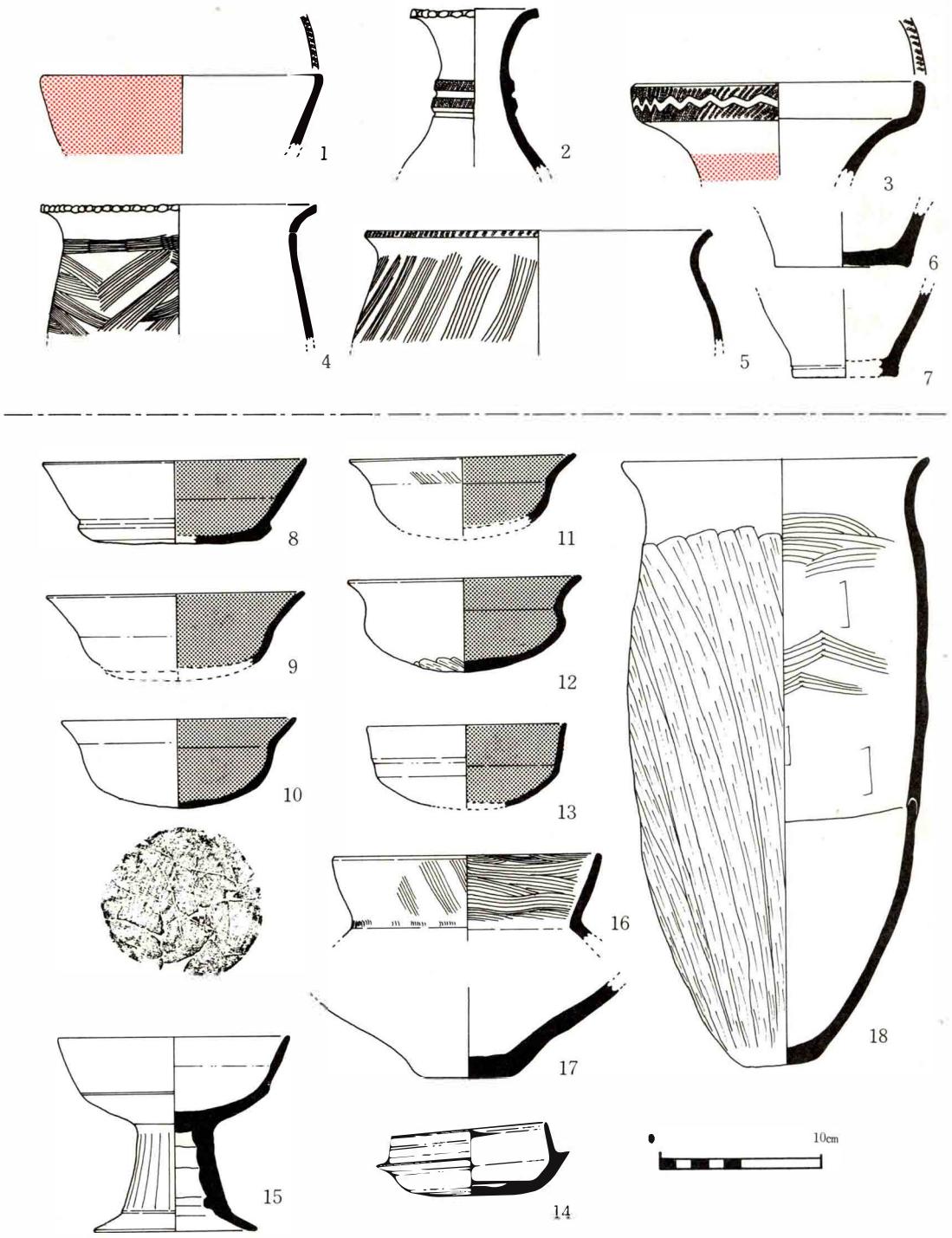
第12図　第１号住居址出土土器



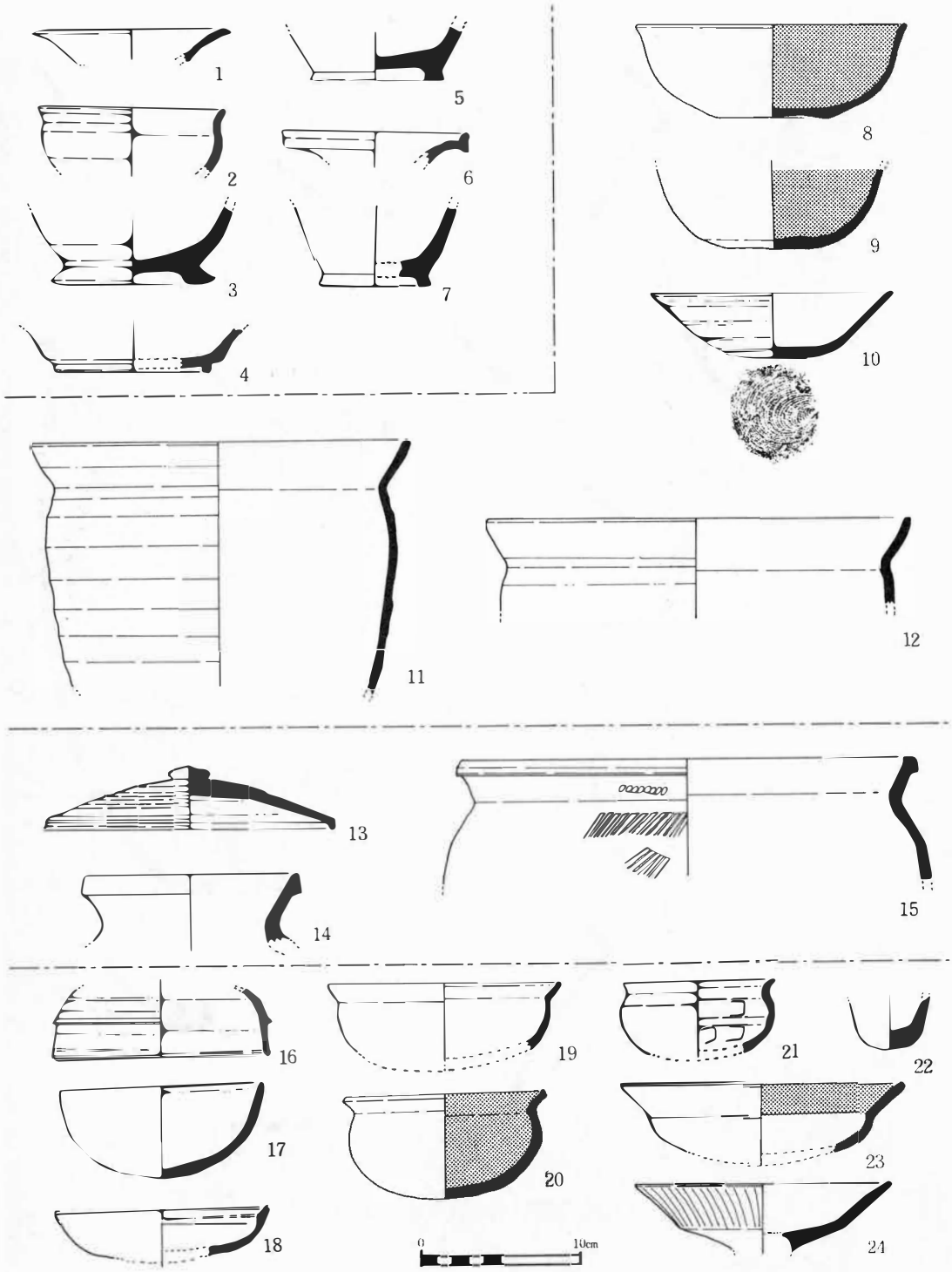
第13図　第4・8・9・10号住居址出土土器



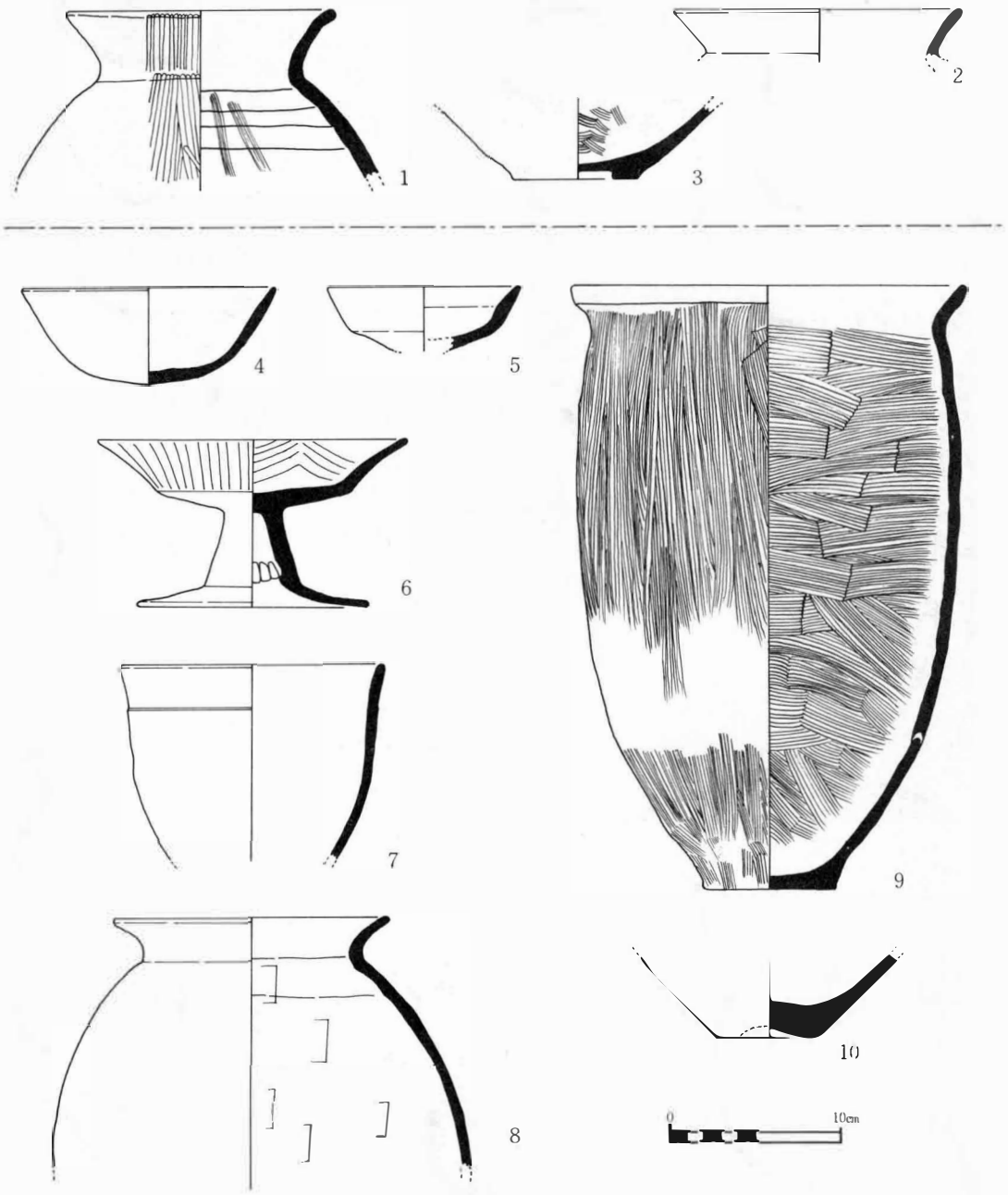
第14図　第10・11・13号住居址出土土器



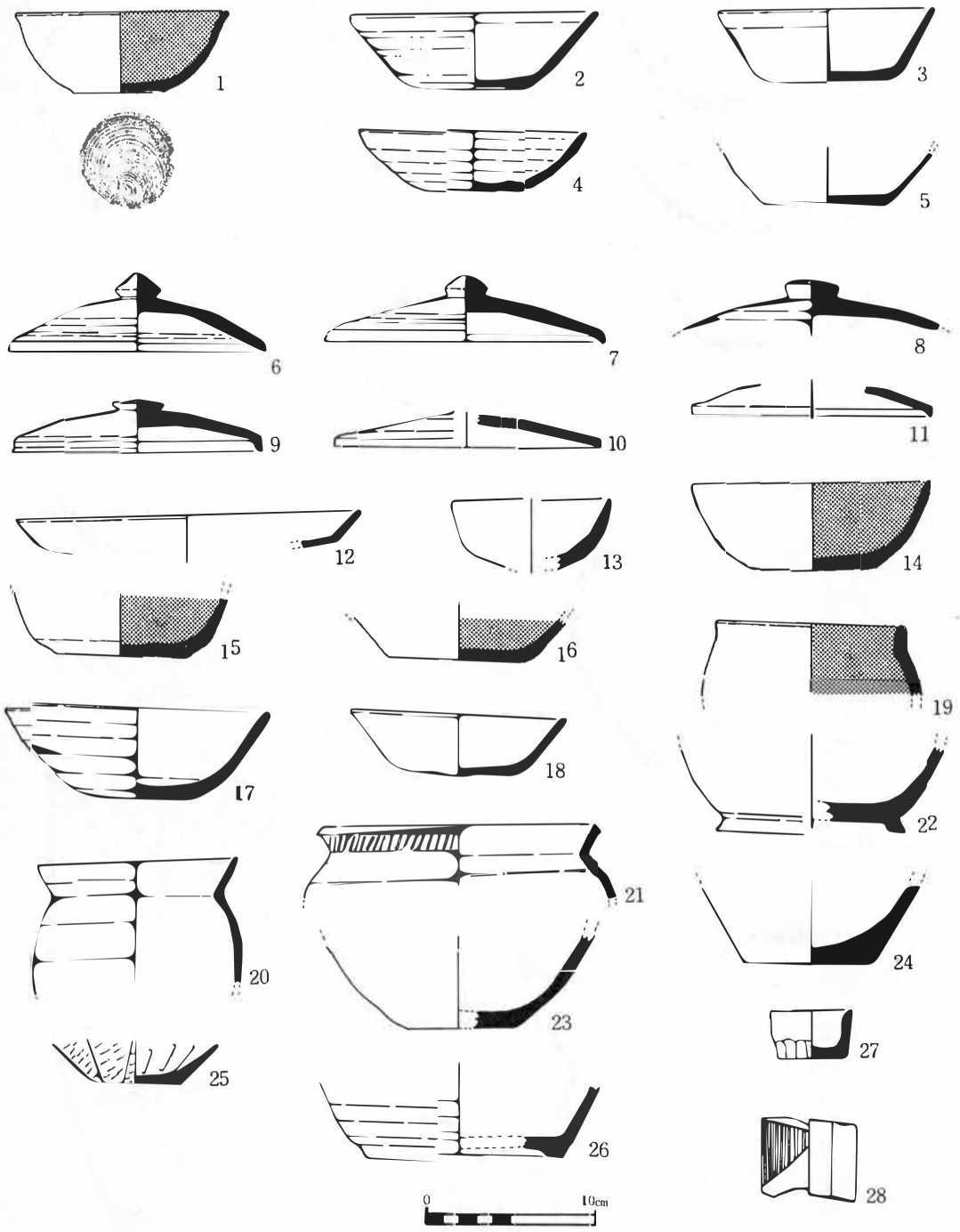
第15図　第14・15号住居址出土土器



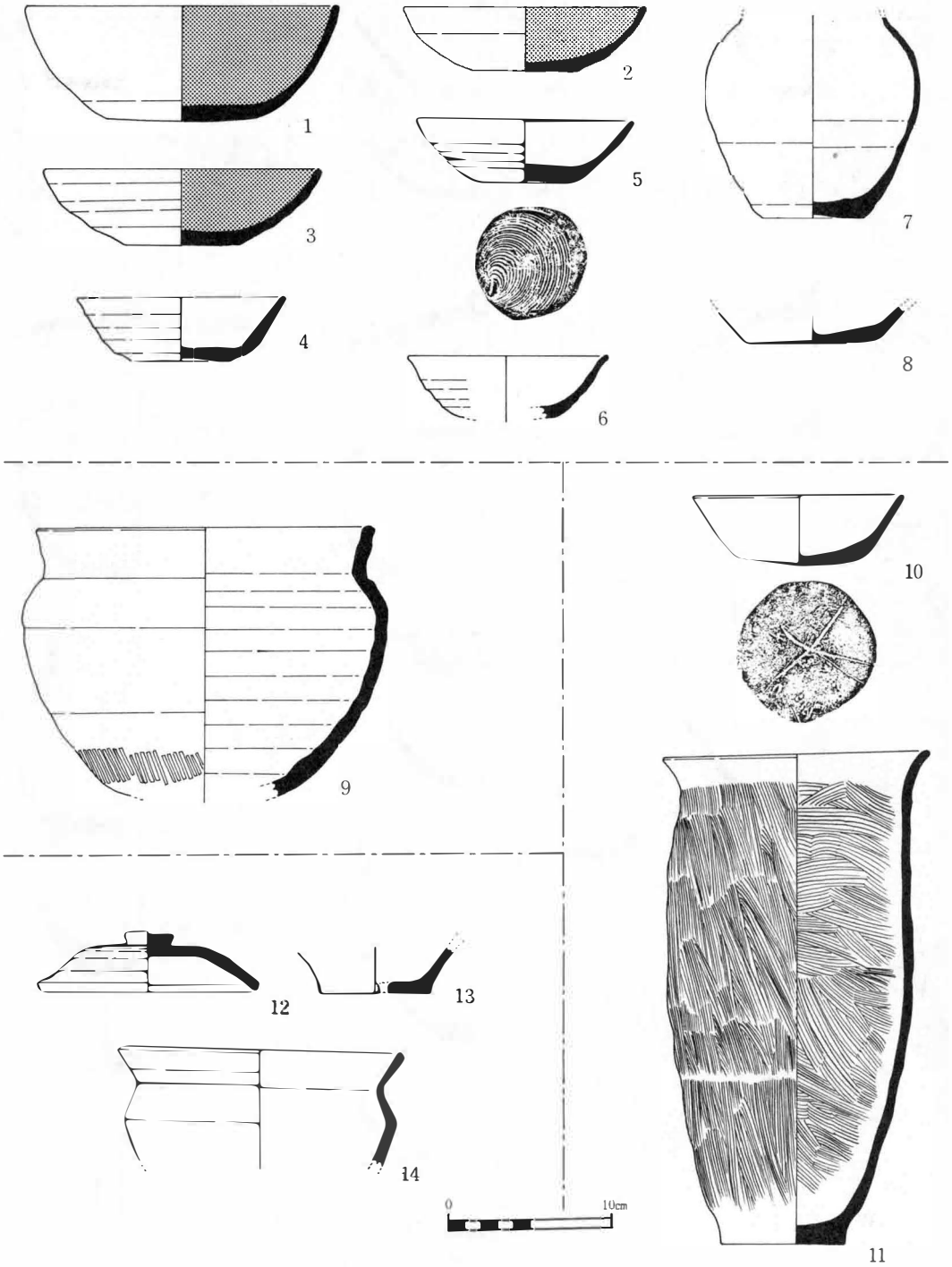
第16図　第16・17・18・19号住居址出土土器



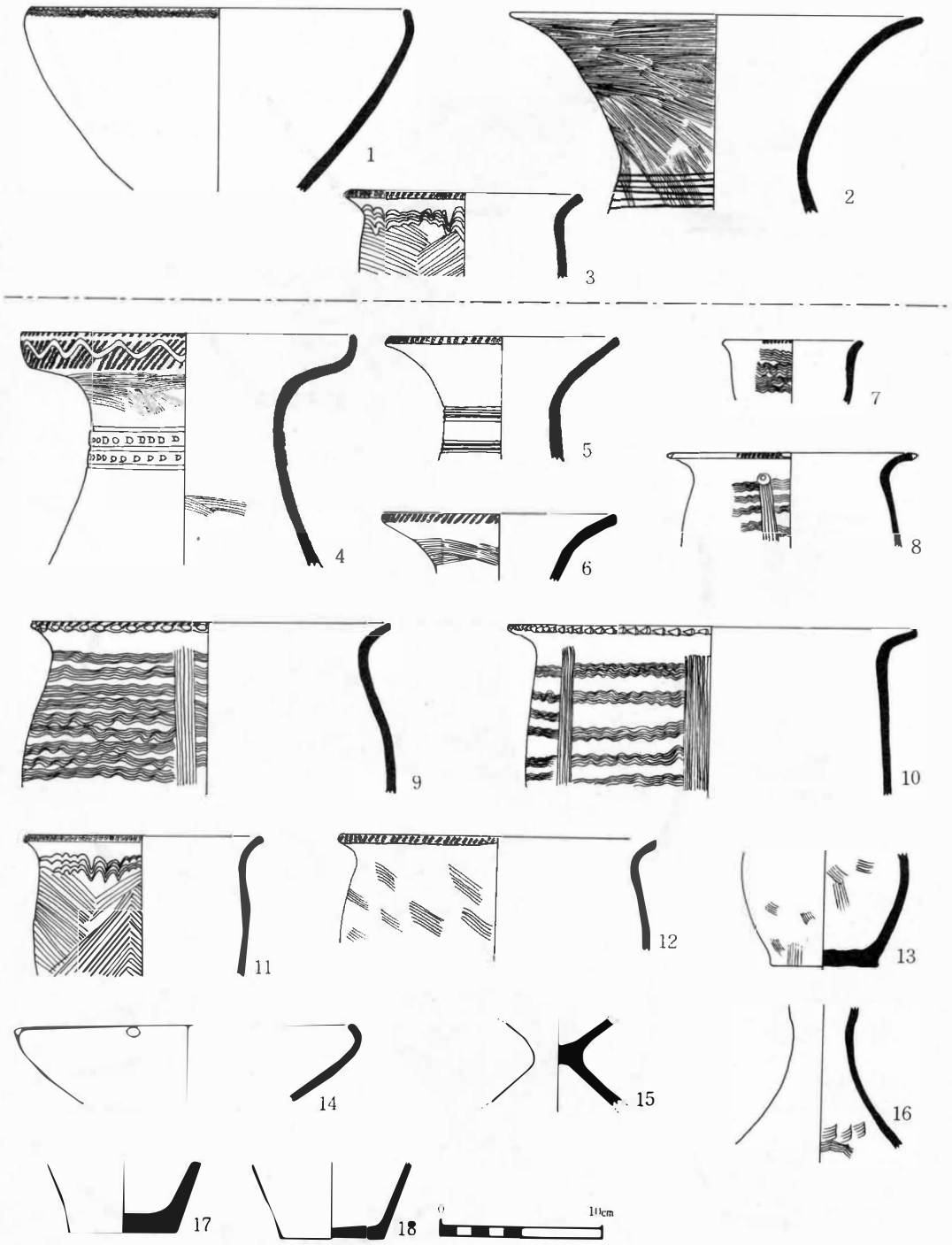
第17図　第19・20号住居址出土土器



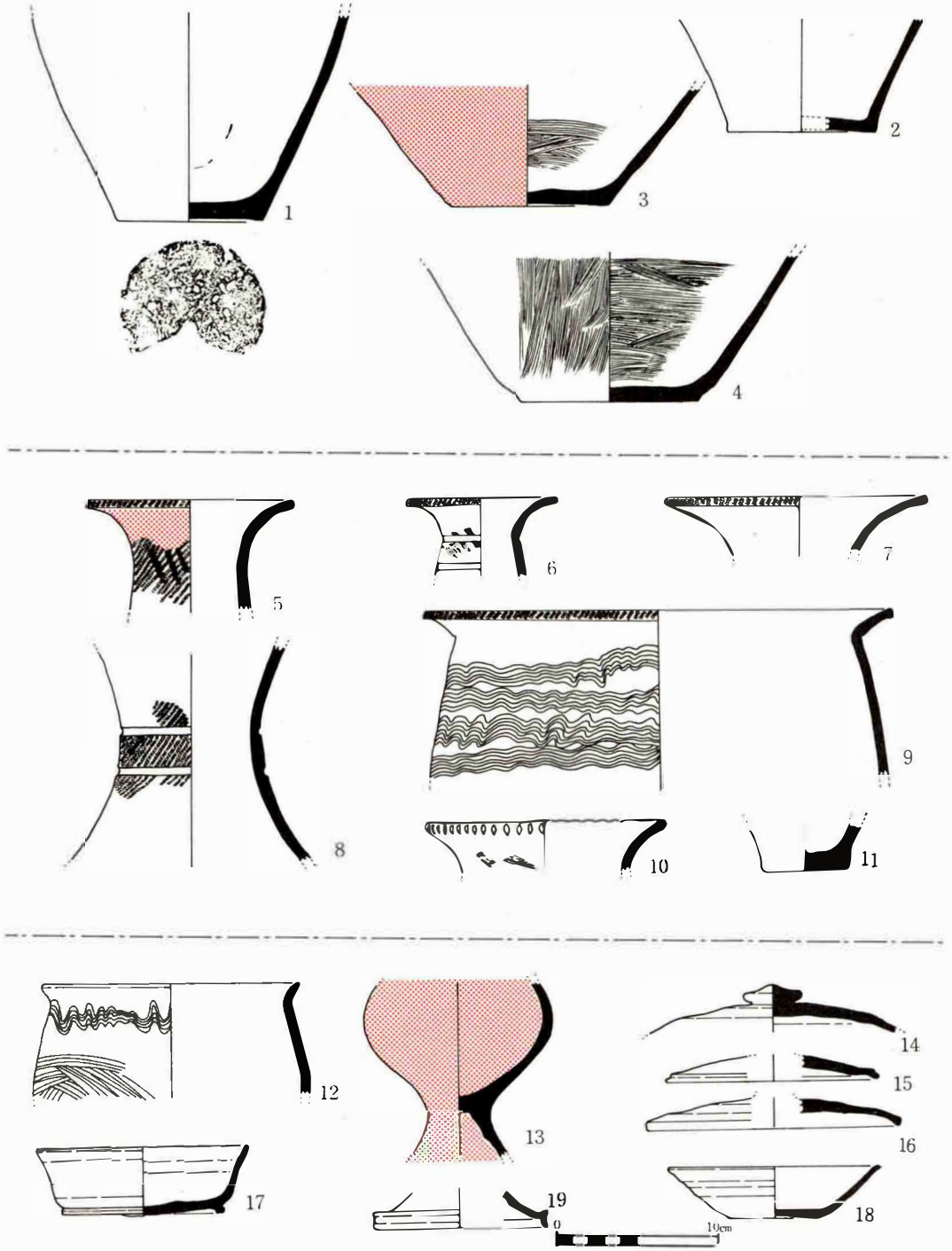
第18図　第22号住居址出土土器



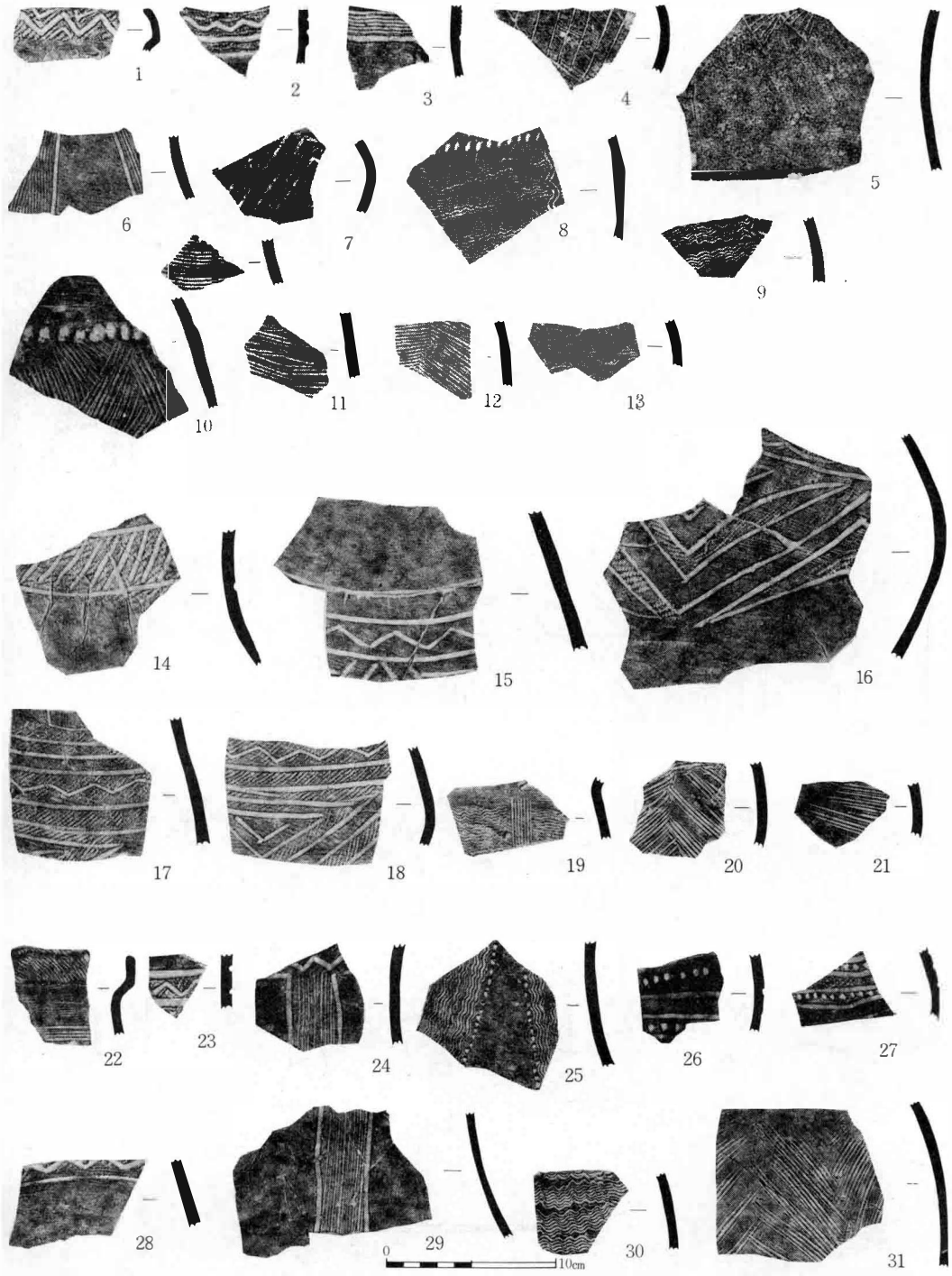
第19図　第23・24・25・27号住居址出土土器



第20図　第28・29号住居址出土土器



第21図　第29号住居址・土坑1・その他出土土器

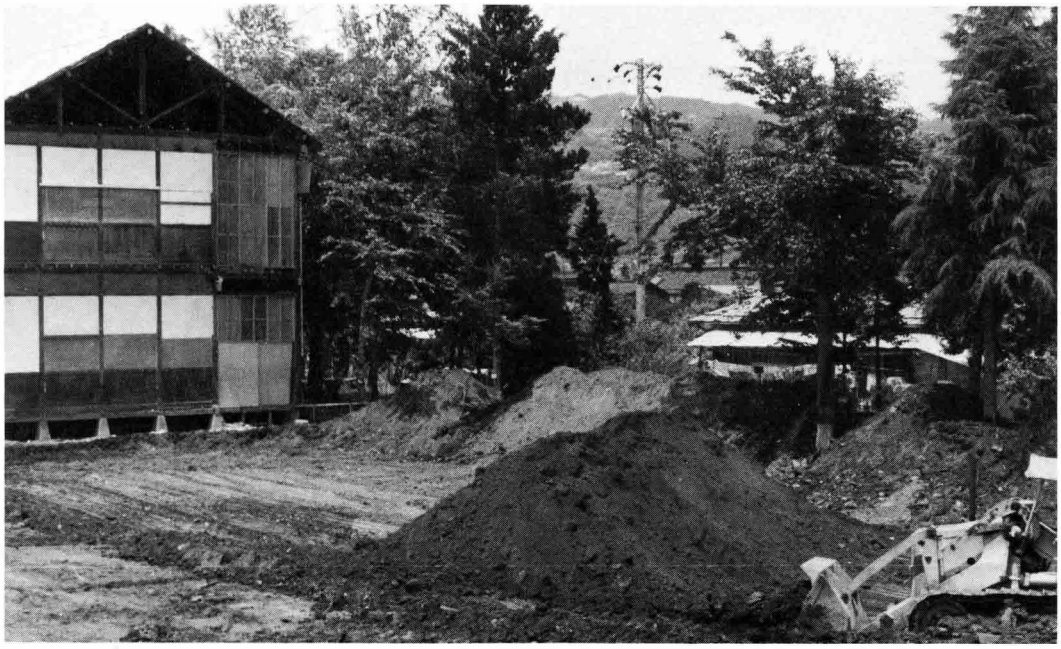


第22図　第14(１～13)・29(14～21)・30(22～31)号住居址出土土器拓影(１：３)

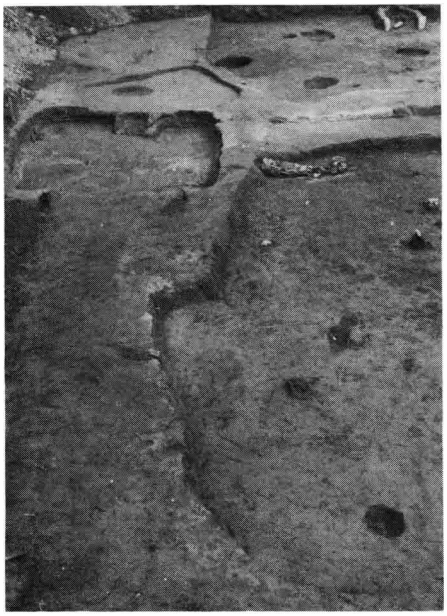
第23図　遺構及びグリット出土土製品(４・５)石器(１：３)

第一図版　遺跡(調査地)遠望・近景

1．遺跡(調査地)遠望



2．調査地近景



第１・２・３号住居址

第５号住居址

第４号住居址

第８号住居址

第29号住居址

第９号住居址

第10号住居址

第１号住居址　　第15号住居址

第12号住居址

第13号住居址

第11号住居址

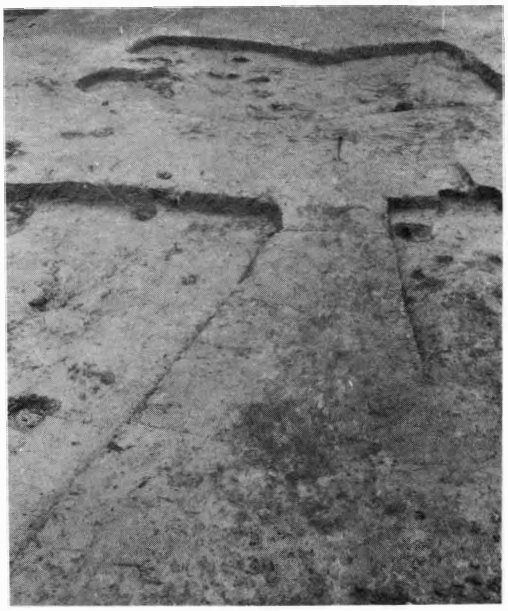
土坑４

第14号住居址

第15号住居址　　第20号住居

柱穴群

第16号住居



第20・21号住居址

第16・27号住居址　　第17号住居址

（第18号住居址）

第20・21号住居址

第17号住居址

（第29号住居址）

第19号住居址

第20・21号住居址

第７号住居址

（第29号住居址）

第19号住居址

第25号住居

第10号住居址
第９号　〃
第29号　〃　　第４号住居址
第８号　〃　　第５号住居址
第１・２・３号住居址

第11号住居址　　第10号住居址
第９号　〃
第12号住居址　　第29号　〃
第８号　〃
第１号住居址

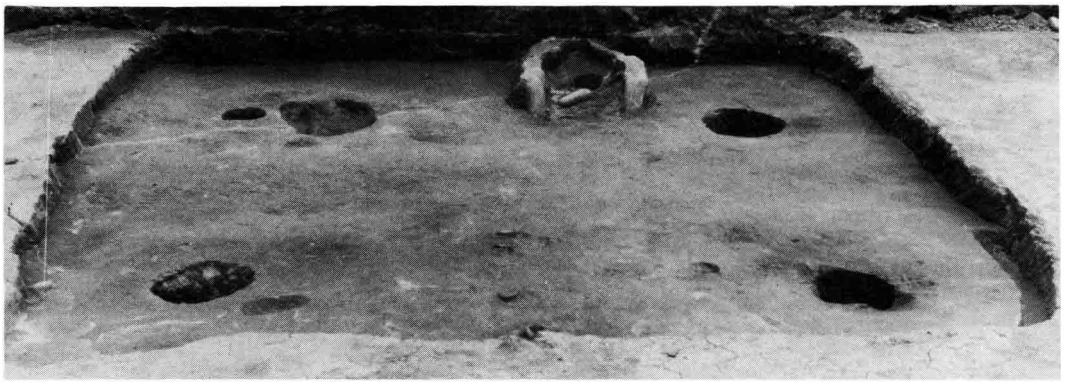
第10号
柱穴群　　第11号住居址
第12号　〃
第１号
第15号住居址

第16号住居址　　第10号住居址
柱穴群　第11号　〃
第13号　〃
第15号住居址

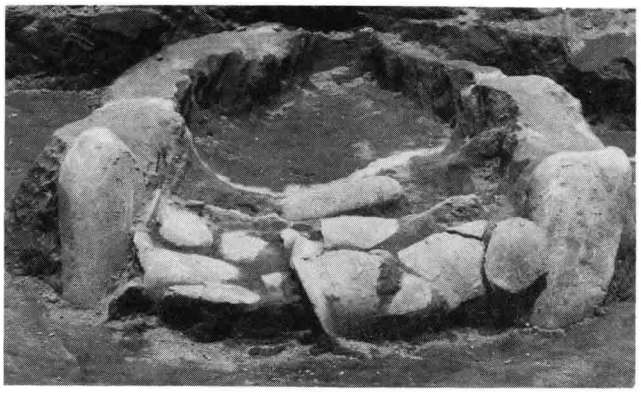
第19号住居址　　第16・27号住居址
第17号　〃
第15号住居址
第20・21号住居址

第19・25号住居址
第17号住居址　　第16・27
（第29号住居址）
第20・21号住居址

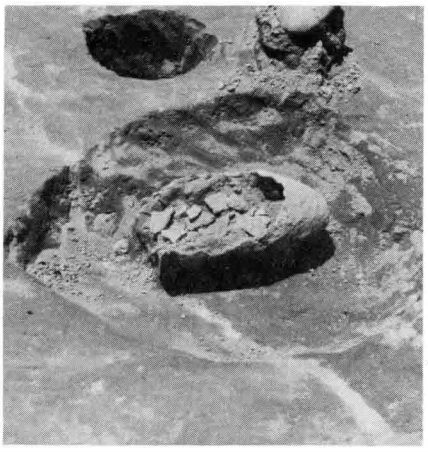
15.　第1号住居址主要遺物残存状態



16.　第1号住居址



17.　同カマド

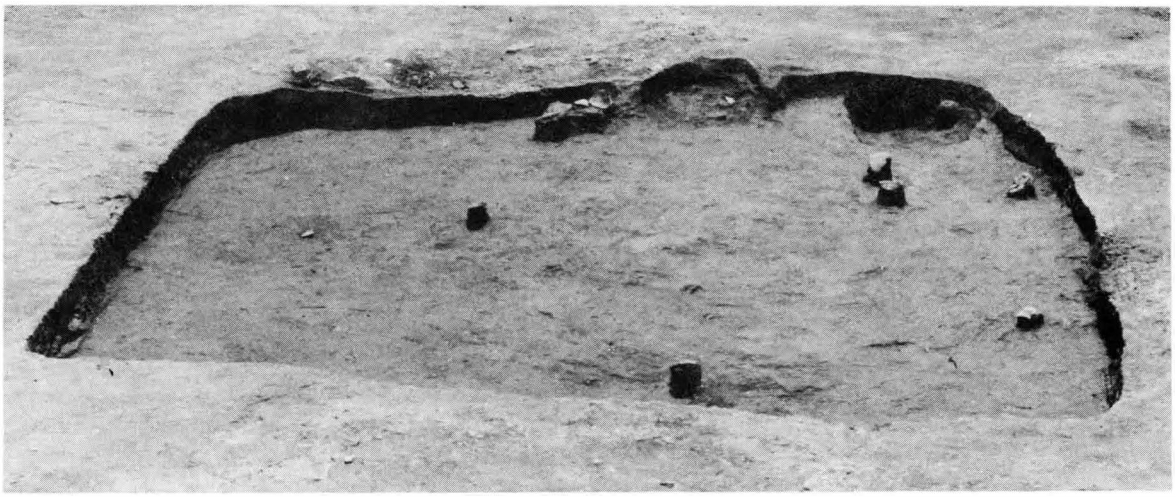


18.　柱穴及びピット

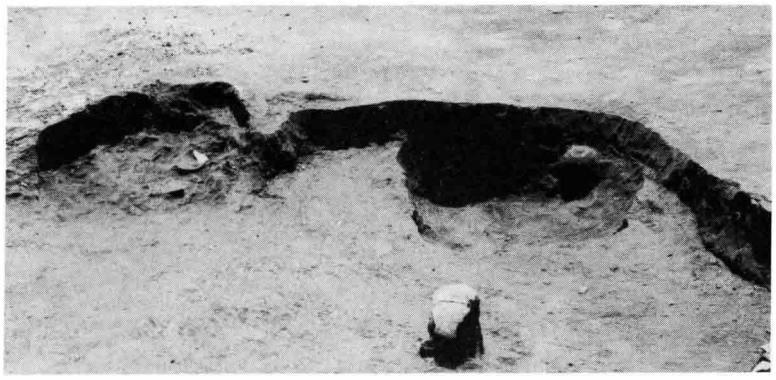
19.　第4号住居址

20.　第5号住居址

21.　第10号住居址



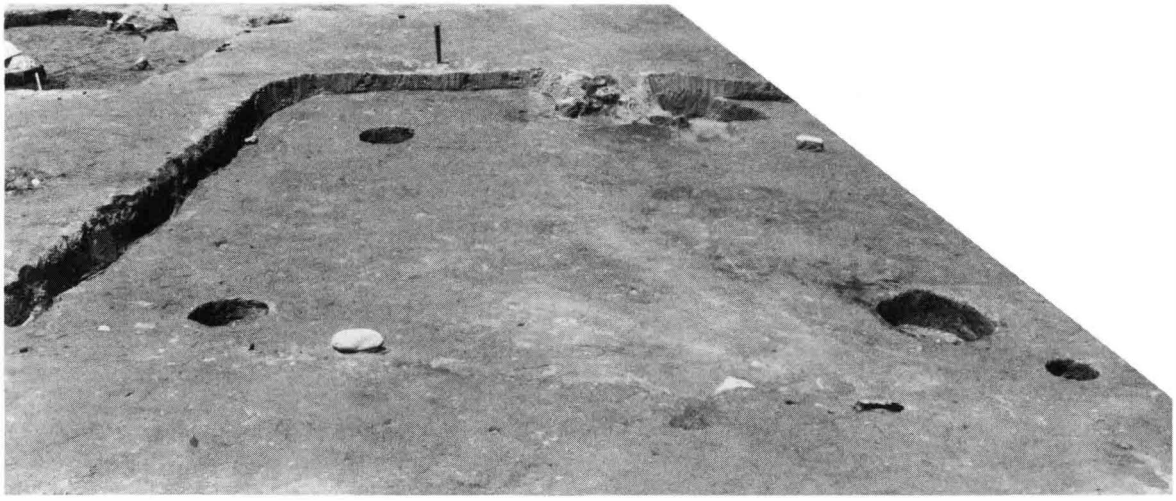
22.　第11号住居址



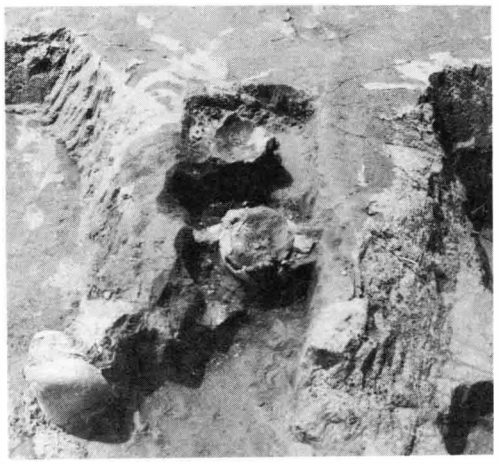
23.　第11号住居址カマド

24.　第4号住居址カマド

25.　第12号住居址



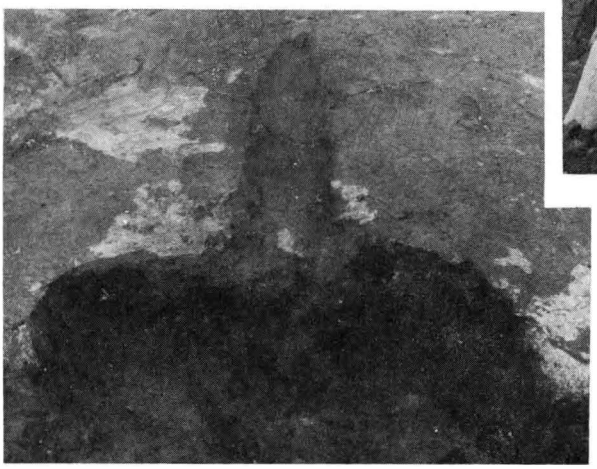
26.　第15号住居址



27.　同カマド

28.　同カマド

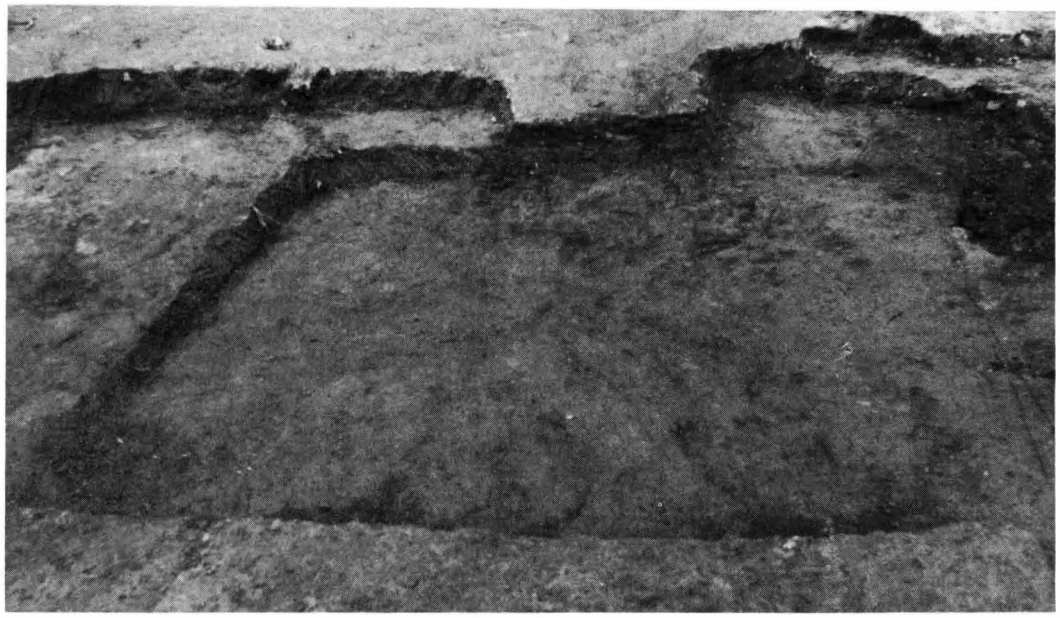
30.　第17・30(部分)号住居址



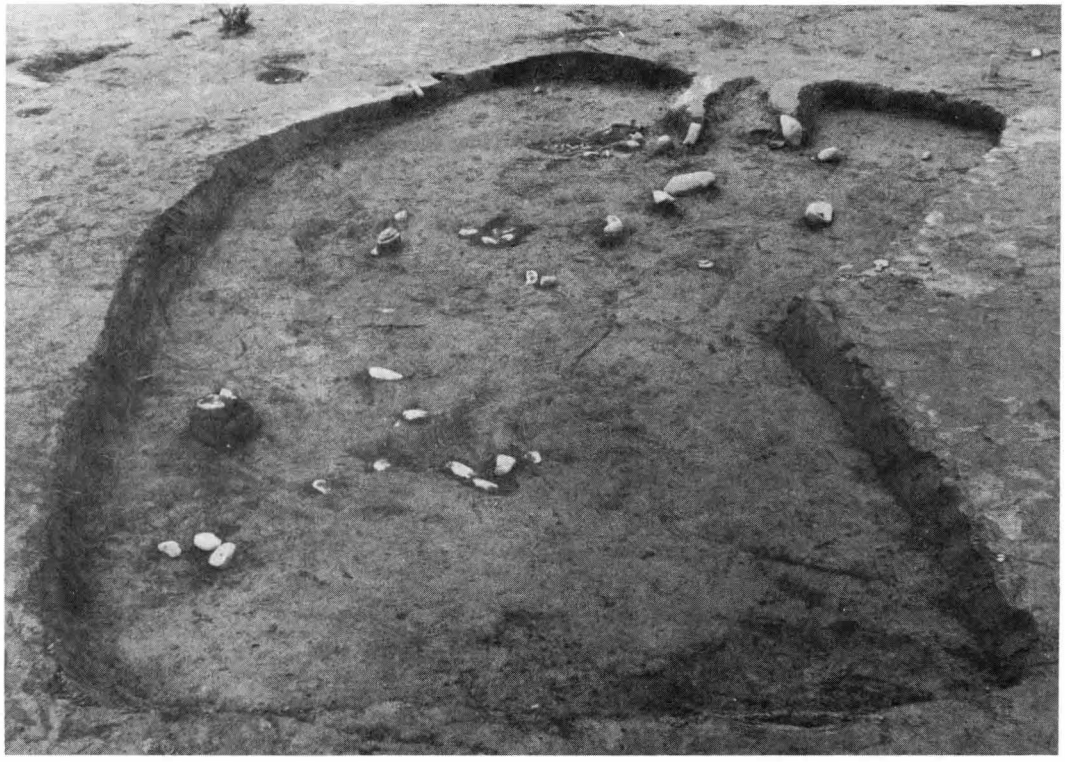
31.　第17号住居址カマド

32.　第20号住居址カマド

33.　第20号住居址

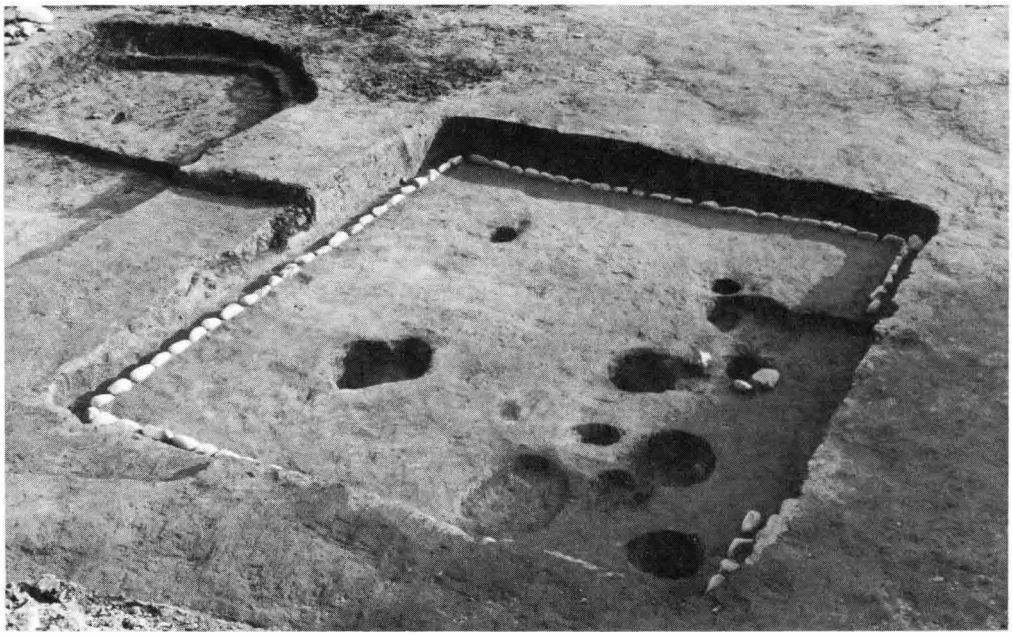


34.　第18号住居址



35.　第20・21号住居址

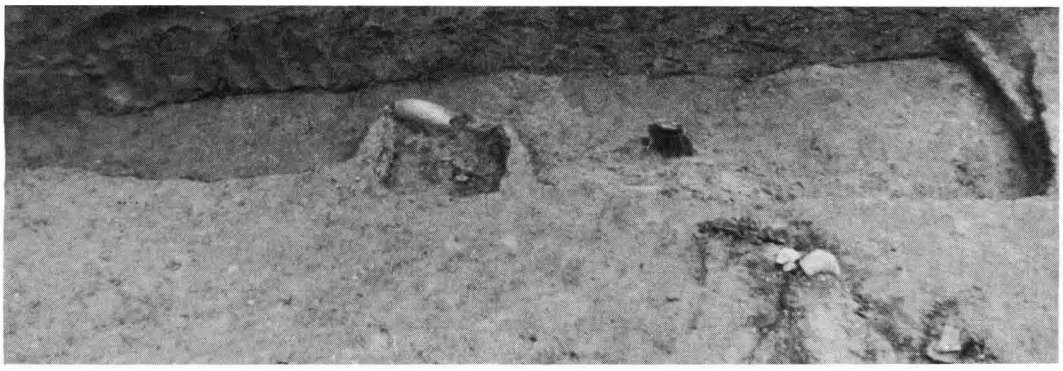
36.　第22号住居址（南より）



37.　第22・23・24・31号住居址（北西より）

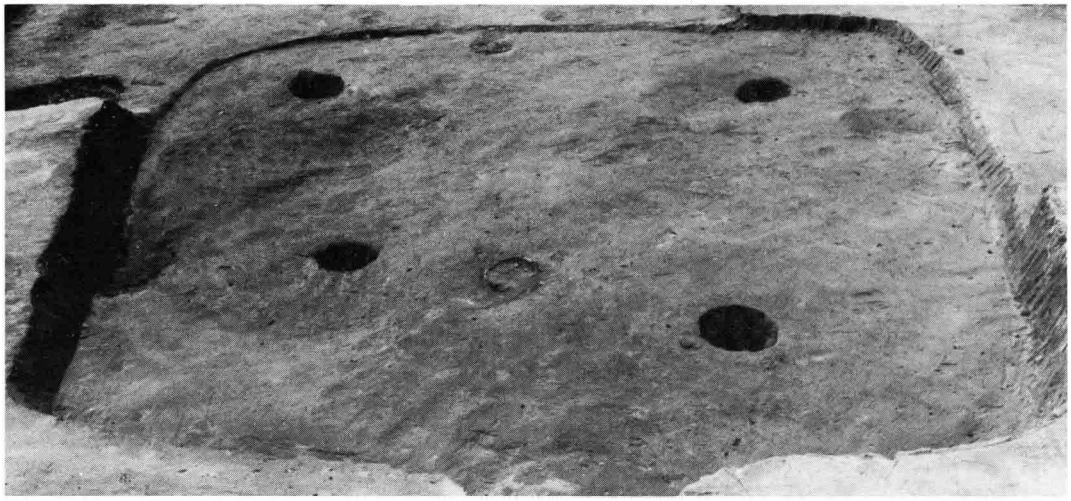
38.　第22号住居址（東より）

39.　第23号住居址

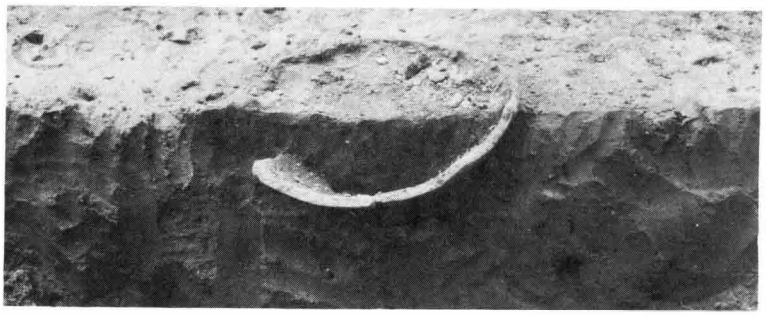


40.　第25号住居址

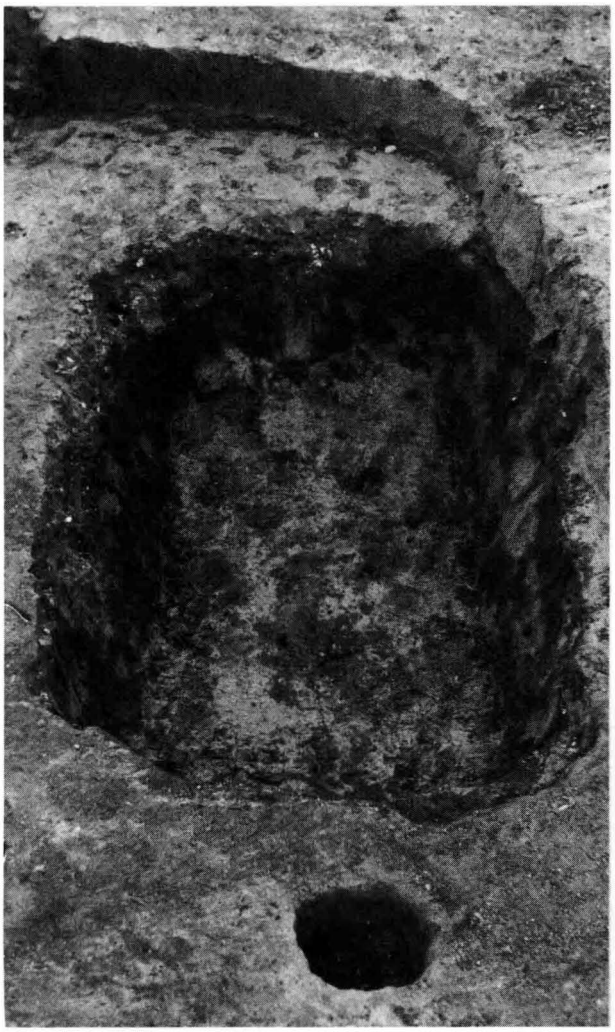
41.　第27号住居址



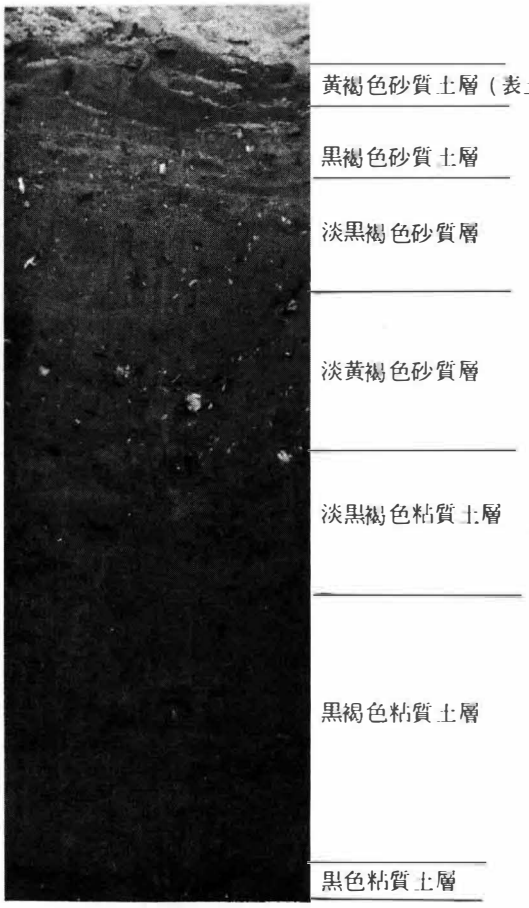
42.　第28号住居址



43.　同　炉

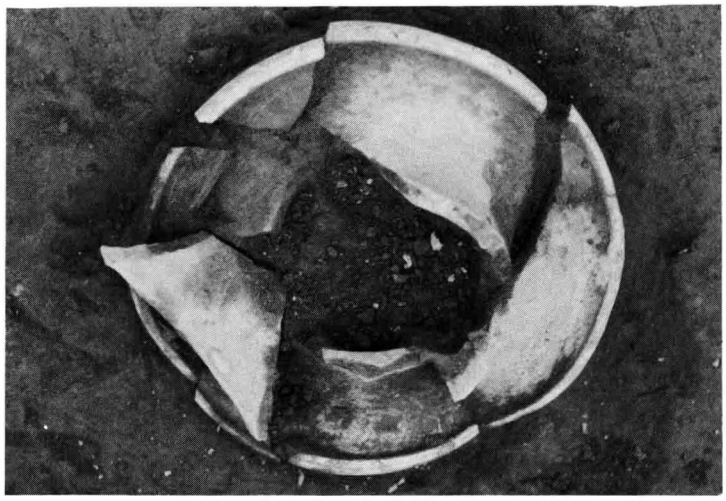


44.　土坑3

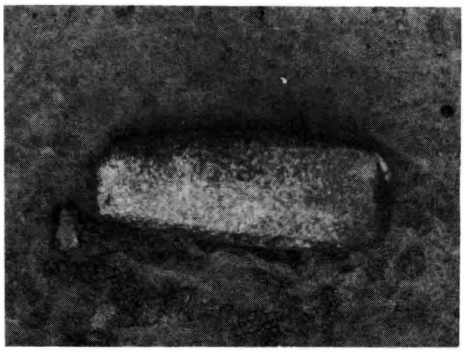


55.　土層序

黄色砂混り粘質土層



56.　第9号住居址

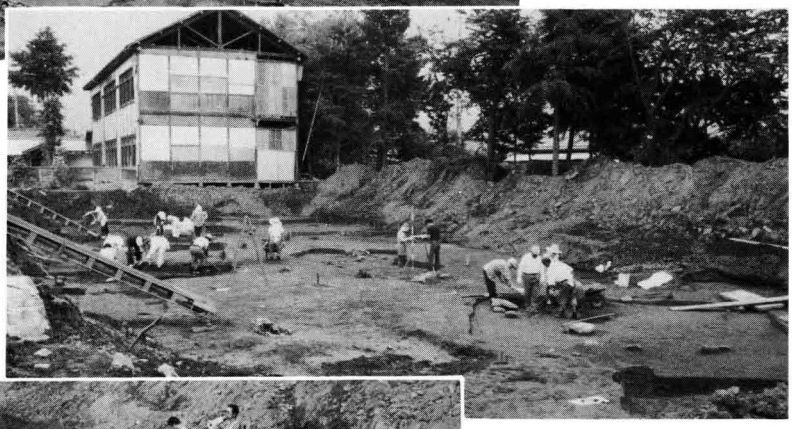


57.　包含層

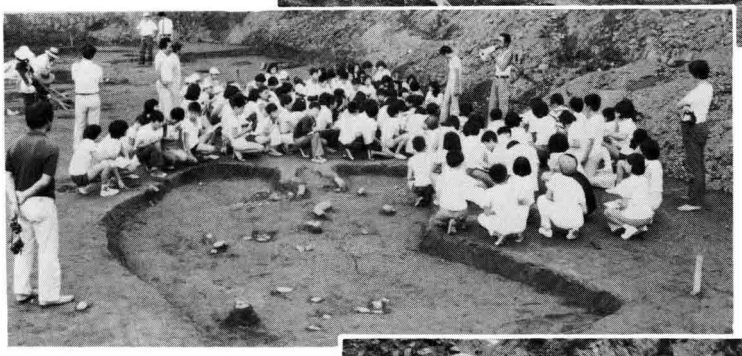
58.　第29号住居址

第一九図版　調査スナップ

残土処理・遺構確認



遺構検出・実測



塩崎小学校児童学習会

同小宮山教頭による学習会

第二〇図　第一・一〇・一四号住居址出土土器